361
2781
0
複写

トエ-4L-11

全國 薪炭生產地荷主案內誌

薪炭新報社發行

大正
15. 9. 9
內交

~~564-4~~
361-278

緒言

薪炭の需要は年と共に増加し今や一ヶ年五億萬貫に達せんとするの趨勢にありて、一面薪炭に代るべき燃料ありとは云へ、量に於ては僅かに一割にも達せざるべく、其代用燃料と稱する煉炭の類、瓦斯の類、石油の類、電熱の類各々一得一失あり且つ用途に於て薪炭にあらざれば能はざる方面多し、從つて其需給の圓滑を圖るべき施設を之を當業者よりせば營利的生業と稱すべきも燃料問題と云ふ公の見地よりせば實に國家的の施設たらずんばあらず、一日も忽緒に附すべからざる最大重要任務なりとす玆に我社が本誌の編纂を企圖せるもの卽ち其供給地及供給者の動靜を消費地に紹介すると共に、消費地の當業者にして供給地及ひ供給者の消息を審かにし、需給接近の仲介者となり居ながらにして消費地當業者を知り居ならにがして生産地荷主を知るの方便に供し以て薪炭需給の圓滑を圖る上の資に供せんとせるものな　而して我社は大正七年八月第一次の出版を以て本著を公にし取引上の資に供したりしも年經るに從ひ其需給界の情況に幾多の變遷を來したれば勢ひ第二次の刊行を必要とし大正十二年十一月一日を以て改訂增補刊行成るべき筈の處大震災は之等の

事業をも妨げ、新たに起つて實地踏査に着手せるも、新報經營の餘暇に讓れると又前回省略せる山陰、九州、北海道が近時大消費地の視聽を引き取引關係亦密接なるものあれば見逃すべからざるの供給地、その實地踏査を遂げ本誌上に載錄せる等從つて本著の刊行自然遷延して漸く茲に發行するを得るに至りたり、然れども尚ほ他に調査洩れにかゝる生産地及消費地あれども本誌を閲讀せらるべき諸賢は皆我が薪炭新報の愛讀者なればその欠陥は隨時新報紙上を以て補ふことゝせり大方の諸賢吾人の衷情を諒とせられたし。

大正十五年八月一日

編者識

全國薪炭生産地荷主案内誌

目次

總說……一
青森縣……四
八戸港—久八線種市—三戸—上北—小湊
岩手縣……三五
金田一—北福岡—一戸—小鳥谷—沼宮内—盛岡—御明神—花巻—遠野—横里線—水澤—一關—東海岸生産地普代—平井賀—島ノ越—岩泉—小本—田老—宮古—小國—刈屋—茂市—山田—鬼間根—大槌—越喜來—大船渡—盛町—長部港—上下有住
宮城縣……七三
鳳茶—仙臺—石巻—米谷—中新田—池月—鳴子—白石
秋田縣……七六
院内—横堀—湯澤—大森—角館—刈和野—五城目—能代—二ッ井—鹿巣—秋田市

山形縣……九四
米澤市—上山—大石田—新庄—餌宰川—向町
福島縣……九八
濱三郡—田村郡—日河—矢吹—須賀川—棚倉—福島市—郡山—會津方面—
—上戸—川桁—猪苗代—會津若松—喜多方—山都—野澤—鶴澤
北海道……一三三
函館—札幌—小樽—旭川—野付牛—早來—室蘭
熊本縣……一三八
鹿兒島縣……一四二
宮崎縣……一四七
和歌山縣……一五八
目高郡—西牟婁郡—東牟婁郡
島根縣……一六六
出雲地方—濱南地方—石見地方—島根縣當局の施設—山陰輸出木炭商同盟會—濱
田町八日會—江津町移出商—美濃郡益田町

鳥取縣……一八四
京都府……一八五
福井縣……一九九
小濱—敦賀—武生—今庄—大野—勝山—福井市
石川縣……二〇二
鵜來—小松—高松—七尾港—中島—穴水港—中居港—宇出津港—金澤市
富山縣……二〇五
笹津—八尾—氷見
新潟縣……二一四
田口—新井—高田—直江津—名立—能生—梶屋敷—糸魚川—青海—市振
柿崎—柏崎—鉢崎—北條—寺泊—長岡—森町—三條—加茂—新津—新
潟—小出—浦佐—六日町—二日町—新發田—中條—坂町—村上—津川—
—白崎—佐渡
山梨縣……二二六
上野原—四方津—猿橋—大月—笹子—甲府

長野縣……二六八
佐久鐵道羽黒下―佐久穗積―小海―田中―輕井澤―上田―長野―須坂―豐野―飯山―柏原―茅野―上諏訪―下諏訪―岡谷―松本―信濃大町―奈良井―藪原―木曾福島―上松―三留野

岐阜縣……二六八
中央線坂下―中津川―大井―岐阜―大垣―養老鐵道揖斐―郡上郡八幡町

神奈川縣……二五八
山北―秦野町方面―消費市場

靜岡縣……二九一
駿河―御殿場―三島―沼津―身延線大宮―岩淵―靜岡―清水―金谷―島田―濱松―大仁―伊東―士肥―河津口―下河津―稻生澤―稻梓―仁科岩科―松崎

愛知縣……二八〇
戀塚―名古屋

埼玉縣……二八一

秩父―小鹿野―寄居―埼玉木炭同業組合の概況

埼玉縣の消費地……二九〇
川越―所澤―飯能―八王子―川口―蕨―浦和―桶川―大宮―鴻巣―忍町―熊谷―深谷―越ヶ谷―岩槻―粕壁―杉戸―幸手―久喜―加須―栗橋

群馬縣……二六七
横川―下仁田―鬼石―澤入―花輪

群馬縣の消費地……二七二
新町―高崎―前橋―大間々―桐生―伊勢崎―館林

栃木縣……二七七
今市―烏山―黑羽―黑磯―黑田原―茂木―市塙―七井―益子―眞岡―兩毛線小山―栃木―佐野―足利―宇都宮

千葉縣……二三一
八幡宿―五井―姉ヶ崎―木更津―小糸川―佐貫―上總湊―保田―鴨川―天津

千葉縣の消費地……二三六

市川——船橋——津田沼——檢見川——千葉——四ッ街道——佐倉——八街——成東——八日市場——旭町——銚子——佐原——松戸——野田——我孫子……三四五
茨城縣……三四五
鉾田——笠間
茨城縣の消費地……三四六
取手——藤代——土浦——佃鍋——龍ヶ崎——水海道——石下——下妻——結城——下館——古河
東京市場問屋案内……三五五
横濱市場概況……四三二
横須賀線主要消費地……四三三
横須賀——田浦——逗子——鎌倉
川崎市の需給概況……四四四

目次終

支那 溫州 漢口 江西 樫柄堅炭
東京市麴町區永樂町二丁目一番地
丸の内仲通り二十八號館
株式會社 鈴木商店東京支店
電話牛込 五二一四・五八七六・五八七七 五八七八・五八八一・五八八二 五八八三・五九三二・六五三〇 六八六〇・六八六一・七〇二八 六八六三・五九三一 木炭部專用

日向延岡白燒炭

在庫品常に豐富
目方正確選別嚴

日向國延岡町紺屋町

商標 日

日向物産商會

延岡郵便局私書函第五號
振替口座福岡一七九二九番
電話二三七番電略(ヒ)又ハ(〇ヒ)

取引銀行延岡銀行＝日州銀行延岡支店

全國 薪炭主要生産地荷主案内誌

總說

薪炭の需要は年と共に增加しつゝあり、從つて原料林の不足を招來し爲に需給の系統を一變し來り嘗ては薪炭の生産地たりしもの今は他縣産を仰ぐ消費地となり、同時に嘗ては白炭の産地たりしものが今は黑炭の製産を奬勵しつゝあるが如く、亦嘗ては粗造品の供給地たりしものが同業組合の設置と共に檢査を勵行し若くは製炭技術の普及を以てして全く昔日の姿を脫し優秀品を産出するが如き、一面消費都市の狀況としても從來は問屋と稱する業者のみに依つて産地荷主と結び來れるもの、今は小賣商の共同荷受もあり單獨直荷受もありて、其望む所の製品も所に依り又消費先に依りて之を異にするも多く、は優良品種を製産する地方に着目し、何れの地より又何れの荷主が如何なる製品を取扱はるゝや如何なる數量を繼續し羅針盤とも稱すべきものに本誌の編纂を企劃し、一見せば其狀況の大樣を知るに易からしめる方便へ供することゝせるなり、而して消費地に於ける消費量の合計は未だ正確なる統計の據るべきものなしと雖も、去る大正八年より十年に亘り帝國森林會の詳細なる調査なるものに

依れば我國一ケ年の消費量は十億二千百九萬貫價格三億九百萬圓とせり、一方農林省の全國各縣に亘れる生産額の調査に依れば甚だしく相違せる如しと雖も、生産額の調査は同業組合又は公共團體の調査にかゝるものを綜合せるものたるべしとすれば、自家用之れに含まざれば其相違自ら知るべきなり

今全國産地に於ける大正十二年度農商務省の調査に依る木炭の産額は左の如し（單位貫）

北海道	五二、二八二、五四四	東京	三、一一七、七五三	岡山	八、六五四、三八五
岩手	三、七六八、八八〇	京都	五、七八七、四八〇	廣島	一一、三四八、三二二
青森	一〇、一〇八、九一七	大阪	一、五三三、七五〇	山口	九、八二三、四八〇
山形	一〇、五一九、〇七六	神奈川	一、八五一、八三四	徳島	五、六八四、〇四三
秋田	一二、六八五、〇三七	兵庫	一〇、八三八、三七六	和歌山	四、九八七、八四七
福井	九、七〇五、八四三	長崎	七、二三四、九二六	香川	一、〇二三、四四七
石川	九、七五〇、五九四	新潟	一四、二二一、八三九	愛媛	五、四四一、一三八
富山	四、四二八、一四八	埼玉	五、四一一、一三五	高知	一五、〇四九、八九九
鳥取	六、六八七、七三五	群馬	一一、九四七、三四四	福岡	三、一二二、二一四
島根	一五、二三四、九九八	千葉	五、一六六、三五二	大分	一三、三一三、七六五
				佐賀	一、一三六、七六三
				熊本	一〇、〇五三、五二五
				宮崎	一五、九三八、五九九
				沖縄	六九四、七六六

茨城	四、七四一、九七六	合計	五一六、九二〇、五一三
奈良	二、一五五、五〇五		
栃木	一一、三九二、八二七		
三重	八、七五八、九〇〇		
愛知	五、三二五、一〇五		
靜岡	一四、二七四、〇六五		
山梨	三、三〇〇、七三四		
滋賀	三、七四八、七六七		
岐阜	一〇、九三七、一八六		
長野	一二、西七一、五〇六		
宮城	九、四〇五、一九二		
福島	二一、五六〇、〇五四		
鹿兒島	一五、八八三、九五五		

以上の内白炭に於て一千九百九萬六百六十三貫黑炭に於て、三千百五十四萬二千七百二貫となり殘餘は鍛冶炭と云ふことゝなるべし、而して消費市場中の主なる東京都市に於ける一ヶ年消費量は大正十二年度に於て木炭は八千七百四十五萬七千六百貫の量を示し、薪にありては一千七百二萬三千二百八十貫に達せり、然れども木炭の需要の年次增加に伴れ薪は瓦斯其他の代用燃料に押されて年々減少の傾きあり、以上之より木炭の生産地の狀況並に移出商の消息等東北主要産地より順次に輯錄することゝせん。

青森縣

年移出額壹千萬貫を關東消費地に供給する八戸湊を主に次いて、近時長足の改善を進め聲價の最も見るべきものある三戸の狀況を次いて上北郡等順次に縣内の狀勢を記さん。

八戸及湊

八戸及湊　青森縣三戸郡八戸驛並湊驛兩驛移出木炭は郡内産は僅かに一割五分にして、八割五分迄は岩手縣下閉伊郡並に九戸郡産にして、岩手縣は縣營檢査に依り楢正味五貫雜正味四貫とし選別を楢丸、楢割、雜丸、雜割に區別し品等別にありては岩手極上、岩手上、岩手込として檢査を施し、郡内産にありては階上村を主とし殊に三戸郡木炭同業組合は三戸最上、三戸上、三戸並の等級別毎俵檢査を勵行し、製炭法は專ら大竹式製法に則り各所に改良講習會を開催し來りたれば品質の優良なる大いに見るべきものあり、八戸湊移出木炭にありても、八戸湊經由岩手木炭業組合の創立ありて岩手縣當局を督勵しつゝある効果として近時面目を改め又一面當業者の發奮に依りて小野寺式並に大竹式製炭法に則りて舊套を脱し資材の調製等にありても昔日の大割は今や其影を失ひ消費市場に於て嗜好する小割に改め改良製炭法に依る効果としては適當なる硬度を計り硬軟その中庸を採り製法上に注意を拂ひ居れば、製品の面目は今や全く一變し來れり

木炭移出商　八戸驛には番町の宮古林業株式會社、驛前の八戸木炭株式會社、高橋吉太郎商店、岩崎恒哉商店、植村彦太郎商店、小笠原木炭部、金澤慶藏商店、十一日町に三ヶ田源次郎商店、荒町に加藤善次郎商店、鍛冶町に中村清吉商店、長横町に中居謂助商店、久水兄弟商會、阿部由三商店の諸店あり

湊驛には驛前に湊物産株式會社、久慈季六商店湊出張所、熊野銀治商店、熊谷儀三郎商店、南部物産株式會社、木村竹次郎商店、中清出張所、中吉出張所、中村きち商店、中田留吉商店、宮澤辰之助商店、武田忠直商店の諸店とす

久八線種市驛　岩手縣九戸郡種市村を中心とし同郡産の供給驛たり、八戸驛より久慈町に至る新線

炭材林地を岩手縣下閉伊郡に有する

登録商標 印 **奥州角俵は**

『小野寺式製炭法』に則り炭材調製にも充分の注意を拂ひ華容の期待に副ふことに努め居り候從つて今回の共進會にも通常製品を出出しの儘出陳せしに悉く參等以上に入賞致し候又戸塚山製品にありては一等に入賞の榮を得候今後一層奮勵御期待に副ひ申す可く何卒倍舊の御愛顧御用命の程希上候

本社 青森縣八戸町 **宮古林業株式會社**

電話一五八番—三一二番

印 **角俵の面目更新**

於一道六縣共進會壹等賞受領

弊社自營製炭所は悉く大竹式と小野寺式とに依り殊に入念製炭致し居り候尚郡内若木の産地とも特約し優品供給に努め居り候條陸續御用命の程希上候

本社 青森縣三戸郡八戸停車場前 **八戸木炭株式會社**

公認 八戸木炭株式會社 **運送部**

專務取締役 麻雄

接待 電話三二六番 電略(八スミ)

小野寺式大竹式

角俵木炭製造輸出

登錄商標 湊

青森縣三戸郡湊停車場前

湊物產株式會社

專務取締役 久慈一郎

（電信略號〇ミ）

電話 二五三番

奥州角俵は

登錄商標 岩

青森縣八戸町八幡町

岩崎恒哉商店

電話 二百三十二番

振替東京一八五四二番

奥州精選角俵移出

青森縣湊驛前

商標

宮澤辰之助商店

電信略號(ミヤ)又ハ(タツ)

奥州角俵輸出販賣

青森縣湊驛前

中清出張所

電話二六三番

本店 陸中久慈町 主任 中野勳

奥州角俵製産移出

青森縣八戸町

中居開助商店

電略(ナカイ)又ハ(ナ)

にして今は種市驛の先き八木驛の開通を見る、同方面は往昔食鹽の製せられし當時老樹は其燃料に供し再生の若木多く從つて丸物多く產し消費市場より歡迎され、然るに岩手縣の檢査標準が徑五分以上三寸を丸とすとあり五分六分程度のものは細きに過ぎ、爲に同驛開通當時の製品は香ばしからざりしが消費地の嗜好を扱みて此の如き細物は小丸として除き又三寸に近き大丸も二寸五分程度に止むるこゝし檢査も近時勵行しつゝあるを以て今は聲價を挽回せり

木炭移出商　此驛に商舖を張り移出を營むものは村上木炭部、湊の中村きち商店、東京大崎驛前角田商店湊出張所の派出、南部物產株式會社出張所、武田商店出張所等なりとす

中野吉郎商店の現況

中野吉郎商店は本店は岩手縣九戸郡久慈町に在り、出張所を青森縣八戸線湊驛前松原川岸に置き岩手縣下閉伊郡新田、江川の山林に夫々山元事務所を設け專ら木炭、木材、枕木の製造販賣を業とす、商標は山きにして中野吉郎氏之を經營し着實なる營業方針は甚大なる信用を博し今や中央市場は勿論支那、臺灣等に輸出販賣し廣汎にして確固たる地盤を有す、同店の製炭業に從事せるは明治四十二年の交にして爾來豐富なる資力と非凡なる商才は克く大規模の計劃の下に事業の步武を進め今や下閉伊郡新田に約參千町步の木炭原料林として恰適なる大森林を買收せる事とて前途專ら此の方面に向つて全力を傾注せんとし年產額十萬俵を訂上せんとするの盛況にあり、而して爾來益々製炭の改良に向つて鋭意努力しつゝありて、久慈町に開催せる九戸郡物產品評會、青森縣八戸町に開催せる一道三縣木炭品評會、盛岡市に開催せる九戸郡物產品評會、青森縣八戸町に開催せる一道三縣木炭品評會に於て夫々賞牌を受領するの榮譽を贏ち獲たり、運炭船として第一久榮丸、第二久榮丸、第三久榮丸の三運送船を所有し自家製炭運送に當りつゝあり、當主中野吉郎氏は久慈町名譽町長、所得稅調査委員、營業稅調査委員、久慈町木炭同業組合組長久慈興業株式會社々長等の公職にあるも今や老齡の故を以て漸次公職を辭し途を後進に讓らんとするの意あり、木炭界の關係漸次令息傳三郎氏之れに當りつゝありて同氏は岩手縣地方森林會議員、八戸湊經由岩手木炭業組合組合長、岩手縣木炭移出業組合副組合長、三戸縣木炭同業組合評議員、久慈木炭同業組合顧問及ひ小本港移出木炭改良組合顧問の重任にあり、同店は眞に其質に於て其量に於て岩手縣木炭界の權威として重きをなしつゝあり

三戸驛

青森縣に於ける改良の先驅地とし木炭の主腦地として主きをなすものに三戸驛あり、青森縣全體を通

じしの實質的産額は一年一千七百萬貫 價格五百萬圓に達し縣下物産中主要の地歩を占む而かも其人部分は三戸並に劍吉、尻内等の各驛を經由する田子、猿邊、戸來等八ヶ村に跨る産地の製品に重きをなし、三戸郡木炭同業組合は改良促進の主力を同方面に注ぎ大竹式製法は産地を風靡し製品は今や此の式に依りて統一されつゝありて、大正十四年四月一日より等級別每俵檢査に依り三戸最上、三戸上三戸並の三階級に分ち、今年にては東北本線に於ける黑炭角俵としては第一流品の地位を獲得し市場に聲價あり

木炭移出商　市場へ供給する荷主を以て組織せる三戸移出木炭商組合あり、志賀治助、工藤三太郎、松尾萬次郎武藤傳次郎、松尾吉兵衛、田中清文、坂田淺次郎、臼杵善次郎、松坂雄三、極櫻忠次郎、安齊重藏、白木商店、櫻井榮太郎、古田七郎右衞門、杉澤三郎、小笠原金太郎、泉山石藏、岩館清吉、西館留、連積倉藏の諸氏を網羅し各々大竹式優良木炭の移出販賣に努む

上北地方

三戸郡に亞いでの木炭の産地は上北郡にして今や上北郡木炭同業組合の設置あり製品の改良に努めつゝあれば八戸湊の在來品に匹敵せるもの又は三戸物に準ずる良品を製出するに至りたるも往昔に

大竹式製造元

於一道六縣木炭共進會壹等賞受領

專用商標 ㊇印 ㊇印

青森縣三戸町(本店)

精撰 志賀治助商店

電話四十番

別邸 三戸町熊之林(電話四一番)

運送部 三戸停車場前(電話四二番)

大竹式木炭移出商

青森縣三戸郡田子村

櫻井榮太郎商店

電略（サ）又ハ（エイ）

奥州改良木炭移出

青森縣三戸驛前

白印角俵 白木商店

電略（シロ）又ハ（シ）

大竹式木炭移出商

青森縣三戸町八日町

松尾吉兵衛商店

電話三三番電略（マツキ）

大竹式角俵移出商

青森縣三戸郡田子村

三 杉澤三郎商店

電信略號（マルサン）

ありては製品全く不統一にして唯その人に依り商標に依り良品なるを知り得る程度にして古間木物若くは三本木物と稱せられ三本木町の稻本酒造店がライオン印角俵として一等地を抜き居るに過ぎず他は悉く並品としての取扱を受け居れり殊に同地方は官行旺んにして黑炭雜割を製産しつゝありて之と民製改良品と混同さるゝの弊なきにあらずして同業組合が製品の改良と其統一に努めたる功績はそれ等粗惡物を驅逐し漸く近頃に於て聲價を贏ち獲るに至れり

同郡内主なる集散地は三本木町にして此の地を經由する産地に法奥澤村あり年額三十萬貫を下らず而かも十和田山林の原料は無盡藏とまで稱し居れり近時此の地方も大竹式製炭法の普及せらるゝあれば品質は次第に向上せらるゝことなるべし

主なる移出商　三本木町には三本木林業株式會社、笹森專太郎商店、池田商店、氣田福三商店、中野渡信衛商店菅原木炭部、古館德三商店の諸店あり

古間木方面には峰源一郎商店、岩城波之助商店の兩店を主とし法奥澤村には田畑勇商店、臭山木炭部、田中木炭部高淵岩太郎商店、福田元吉商店等あり

三本木町に亞ぐ集散地は七戸町にして此地は郡衙所在地にして上北郡木炭同業組合事務所あり、生産地は八甲田山麓を主とし駒ケ嶽、八幡嶽山麓は薪炭雜木林に富み現在の産出額を以てせば今後幾十年を經るも盡きることなしと稱へらる、七戸町に集散の木炭は東北本線千曳、沼崎、乙供の各驛より市場へ供給せらる

主なる移出商　七戸町には中野吉太郎商店、須藤重右衛門商店、藤居德太郎商店の三店を重しとす

次ぐに野邊地町を數へざるべからず、北郡北端五ケ村の生産品は此の地に集中し野邊地驛より市場へ供給す、同地方も大竹式製炭法の長所多きに鑑み副組長濱中源七氏は專ら普及に努め各地に製炭改良講習會の開催せらるゝありて最近製出の木炭は面目更新されたるを認む

主なる移出商　濱中源七商店、駒井長太郎商店、蛯名商店の三店を重しとす

小湊驛

此驛より市場へ供給する木炭の産地は東津輕郡を主とせり未だ共同的改良施設なるものゝ設置なく製品亦不統一なり從つて自覺せる當業者のその人に依つて偶々改良品の移出をなすの程度なり、荷主としては楠美榮吉氏の古くより營み來れるあり白炭を主とし黑炭を從とす又最近東平内村の共榮土地株式會社山林部が堀田文八氏經營支配のもとに製炭を開始し東京王子町に出張所の設けある等手廣く移出を營みつゝあり又逢坂三之助商店も數へざるべからず

大竹式精選角俵

手山經營——品質本位

青森縣上北郡三本木町

三本木林業株式會社

電話六番
電略(三リン)又ハ(三)

營業科目 角俵木炭 齒板下駄移出

改良角俵黑炭移出

桐材製板履物原料商

青森縣上北郡三本木町

商標

木炭製造
移出問屋

笹森商店

電話六四、電略(ササ)又ハ(サ)
振替口座東京 四三九八九番

商標 源

木炭移出商 峰源一郎商店

青森縣上北郡古間木驛前

電信略號（ミネ）

商標 M

木炭移出商 濱中源七商店

青森縣野邊地町

電話四番

振替東京二三五四一番

大竹式改良木炭

商標 長

駒井長太郎商店

青森縣野邊地驛前

電話三十二番

電略（コマ）

木炭製産移出並に立木販賣

共榮土地株式會社山林部

事業所　青森縣東津輕郡東平内村

主任　堀田文八

營業所　東京王子町堀の内神戸棧橋會社内

主任　吉弘宏

電話小石川五四六一◇王子六八番

當社は二千町歩の製炭原料林を所有し小湊驛より現場迄專用軌道並に私設電話の設備を有し現在年産額三十五萬俵を超ゆ希望者には便宜且つ低廉價に立木をも賣却す

岩手縣

岩手縣は北海道を除けば我國第一位の木炭の生産地にして其品種も亦東京市場を始め關東各地消費地に恰適せる黑炭にして一ヶ年全産額四千萬貫中の九割を占め白炭としては宮内省御用として古くより名を獲たる盛岡物と水澤物の一部と他は部分的に各郡より産出する程度なり、同縣は大正八年より縣營檢査を實行し岩手縣木炭檢査所なるものを中央縣廳内に置き左記三十一出張所を設置し檢査の統一と正確とに努め居れり

盛岡、日詰、花卷、黑澤尻、水澤、一の關、川口、沼宮内、小鳥谷、一戸、福岡、金田一、大野、種市、久慈、野田普代、平井賀、小本、田老、宮古、山田、大槌、遠野、吉濱、大舟渡、今泉、大籠、黄海、川尻、田山

始め檢査を別ちて合格と不合格との二種に分類し不合格も其儘に市場へ供給し改造手直し修正を加へざれば移出をなす能はずと云ふが如き制度なかりしを以て取引上弊害の伴ふこと尠からざるものあり依つて檢査所當局も漸次に考慮を廻ひ檢査吏員の熟達と相俟つて等級檢査を行ふことゝなり岩手極上、岩手上、岩手込の三等級とし量目は依然樹を正味五貫雜を正味四貫とし檢査の勵行に努むると共に、一面には市場の嗜好なるもの優良品にあらざれば迎へざる傾向となり炭材の調製等に

於ても市場の好みを容れ改良の歩を進むるに到りたれば、今日に於ける岩手縣産出木炭の改良せられしものは全く理想に近きものありて、東京及び東京近郊隣接諸縣下消費市場に於て消化さるゝ木炭の大部分は岩手縣産黒炭角俵に俟つと云ふが如き權威を贏ち獲るに至れり、從つて他縣にして東京市場へ供給をするにあたり其製品を東京向に改めんには如何にせば可なるやと云ふに於て先づ以て岩手縣の製品の標準に學びつゝあるの傾向とはなれり、本誌は岩手縣の生産地及び荷主を案内するに當り先づ順序として東北本線より遠野方面に及び而して東海岸宮古を中心とし其各産地の狀勢を概錄せんとするものなり

金田一驛

此の驛集散木炭は殆んど大部分が黒炭角俵にして年移出額百二十萬貫に達すべし生産地は輕米を中心とせる九戸二戸の二郡なり、品質優良なるものを出す

主なる移出商　澤田福次郎商店、小笠原與吉商店、關口龜次郎商店、石田圓次郎商店、玉川千代吉商店の諸店なり尚ほ九戸郡伊保内村に中野龜太郎商店あり多く此の驛より移出す

北福岡驛

年移出數量に於て金田一とかわらず品質も略ほ同樣なるも此の地は南部丸俵と稱する丸俵を殘存し角俵七分丸俵三分の割合なり生産地は九戸郡伊保内村を主とし輕米方面にして又二戸郡産の一部が此の驛より移出す

主なる移出商　澤藤倉次商店、小保内松次郎商店、高畑榮次郎商店、國分又右衛門商店、富賀見金次商店、相馬市助商店、黒澤治助商店出張所、等を數ふ尚ほ二戸郡淨法寺村に鍋口嘉太郎商店、佐藤喜太郎商店あり共に著名なり

一戸驛

岩手縣下に冠たる中村龜次郎氏の本陣地たり同店は各地に出張所を設け年輸出額十二萬俵を下らず手山製産多く夙に小野寺清助氏を聘し製炭改良講習會を開催すること屢々にして山力の商標小野寺式は特に聲價あり、尚ほ此の地を中心に二戸郡木炭業組合の設けあり明治四十年の創立にかゝり縣營檢査と氣脈を通じ鑑元改良促進と組合員の親睦的統一とに事蹟を擧げ中村龜次郎氏を組長に澤藤

倉治氏を副組長に選任し業務の執行にあたる、此の驛より移出する木炭の數量は黑炭の角俵多く年額八十萬貫を示せり、生産地は九戸郡伊保内、戸田、山形、二戸郡浪打、烏海等にして薪炭林の蓄積豐多なり

主なる移出商　中村龜次郎商店、滝岡藏助商店、中鳥萬次郎商店、堀口次郎右衛門商店、夏井德次商店、平野清七商店、高見虎五郎商店等とす

小鳥谷驛

此の驛移出木炭は往昔甚だ粗惡にして聲價更にあがらざらしが一戸町中村龜次郎氏が小野寺式に依る製品に改良せると、最近三戸町志賀治助氏が下閉伊郡小本に通ずる縣道に面せる林源地に大竹式製法を以て生産に着手し優良品の移出を開始せるに基因し他の業者亦競ふて良品供給に努めらるゝを以て小鳥谷驛移出木炭の聲價俄かに向上し東京市場よりの注文殺到の盛況を見ること屢々なり、生産地は九戸郡姉帶、田部、葛卷、江刈等にして、大正十年の交葛卷村より縣道の設けらるゝありて從來沼宮内驛を經由せるものが此の驛に集散するの狀況と變じ移出量從つて增加し今や年額百五十萬貫の多きに達し居れり

主なる移出商　中村龜次郎商店出張所、三戸町志賀治助商店出張所、葛卷村三浦榮五郎商店出張所、平野倉藏商店、仁昌寺定吉商店、仲下商店等を重しとす

沼宮内驛

岩手縣岩手郡東北本線沼宮内驛は一ヶ年二百八十萬貫の大量を市場へ供給するの移出驛にして八戸湊に亞ぐの地なり、然れども其製品にありては二流品扱ひを受け聲價全く揚らざるものありしが、沼宮内木炭業組合の活動と當業有識者の發奮に起因し今日の製品は改良の跡歴然とし　戸湊移出木炭と遜色なきに至れるは慶ぶべき現象なりとす、而して此の驛へ集中する其原産地は同地より九里を距る九戸郡葛卷江刈方面にして生産地にありては漸次深山に進むに伴れ大樹となり丸物少く割多きは亦致し方なかるべしと雖も近時小割に調製し燒方を改良しつゝ大樹を以て丸代用品たらしむべく努むる傾向あり需要地の趨向を受くるにあらざれば販路局限すべきに依るべし、東北本線にありては三戸物を筆頭に八戸湊物、一戸小鳥谷方面物と相俟つて互角の勢力を贏ち獲べしとて當業者には意氣込み居れり

主なる移出商　高橋百次郎商店、齋藤新吉商店、稻村商店、長内仁太郎商店、高橋宇吉商店、久保松壽商店、三橋

兵三郎商店、佐々木藏次郎商店、國定榮太郎商店等を重しとし、又原産地葛巻に三浦榮五郎商店、遠藤彦三郎商店高橋祐助商店、遠藤安太郎商店、遠藤庄作商店、下村吉三郎商店等を數ふ

盛岡驛

盛岡物と稱するときは堅炭を想はしむ其橋場線開通以前にありては多く此の驛に集散せるも鐵道開通以來岩手郡御明神、西山、御所等の各地産は其地移出商の手に依て市場へ供給せられ現今盛岡市移出商の手に歸屬するものは下閉伊郡川井村附近より門馬村並に岩手郡梁川村の産、紫波郡乙部村の産等にして堅炭六分土釜四分の割合なり

主なる移出商　宮田謙吉商店、石川與七商店、石川三郎商店、吉田清七商店、上林千代治商店、川村市助商店、真條彦太郎商店、田澤德太郎商店、七木田政吉商店等なり

御明神

盛岡驛より西方面へ向け林産搬出の上に惠まれし橋場線開通以後にありては御明神、西山、御所方面の林源全く開發せられ、盛岡市に店舗を有せるものゝ移店又は出張所開始爾今日に於て盛岡物と稱せらる木炭は御明神を中心とせる沿道各地産を指示するに近き程なり優良なる堅炭を産する外近時黑炭製出に傾き優品を産出す

主なる移出商　工藤善太郎商店、福井一郎商店、新黑廣定商店、佐々木久次郎商店を重しとす

花卷驛

花卷驛は沼宮内に亞ぐ大量移出地にして年移出額二百五十萬貫を下らざるべし、生産地は岩手輕便鐵道沿線の晴山、土澤、小山田等にして素と東北木炭の未だ改良せられざる當時にありては遠野木炭と共に八戸湊を凌駕し一俵五錢乃至拾錢高を以て取引せられたりしが、現今にありては三戸物の改良急速に進み之れに次ぐに八戸湊經由宮古方面物の改良せらるゝありて、遠野、花卷木炭は東北木炭中大竹式小町寺式に依る最優品の次に位せるが如し、爲に漸次當業者の發奮伴ひて改良の歩を進めつゝあり、而して花卷驛移出量としては輕鐵に依つて搬出せらるゝ遠野物を除けば遠野の六に對する四の割合に過ぎざるべく薪炭林過材の結果は自然遠野方面に進むことゝなるべし、製品は岩手縣檢査規則に準據し東北角俵として市場に現はるゝものに包含す

主なる移出商　小原政治商店、中目直也商店、北山鏘一商店、高橋金太郎商店、佐々木源吉商店、川村德治商店

等なり

遠野驛

岩手輕便鐵道沿線遠野町は花卷驛よりす同地に集散する木炭は上閉伊郡並に氣仙郡の產にして幼齡樹林に富み中央市場に於ては遠野物として東北木炭中冠たる聲あり今日にありても改良怠らざれば他品に比し決して劣ることなけれども近時特に吟味改良せる小野寺式又は大竹式の最優品に比すれば多少の相違なきにあらざれども、遠野木炭の聲價は依然保持せられつゝあり、遠野町移出木炭の年額は約二百七十萬貫を示し、當業移出商の共同施設に遠野木炭業組合あり大正九年六月七日の創立にかゝり組長に瀧田德助氏副組長に菊田儀助氏擧げられ親睦結束の實を擧げ檢査所と相携へて改善促進に向つて事蹟を示しつゝあり

横黑線

黑澤尻澤は横黑線全通以來木炭とは關係を遠さかるの狀況に變じ同驛に營業所を有する金成常吉、

遠野木炭移出商

遠野木炭業組合員

㋟ 瀧田德助　㊂ 新田三次郎
㋒ 淺沼作太郎　㋑ 森川春治
㋜ 山本林藏　㊐ 俵田潔巳
㋕ 菊田儀助　㋝ 菊地留吉
㋞ 豐田卯一　㋡ 菊池久二
㋠ 五十嵐寅市　㋣ 坂本梅重

後藤圭介、石川運送店木炭部、加藤正憲の諸氏には唯店舗を構ふるのみにして營業の手は川尻、横川目方面に延び活躍しつゝあり故に本誌亦黑澤尻の消息を省略し直に横黑線の案内に移らんとす

黑澤尻驛より秋田縣横手驛へ通ぜる横黑線は大正十三年を以て愈々全通せり、沿道は薪炭林に富み薪炭の生産亦多く前途に囑目されつゝありて其各驛中最も主要なる移出驛は川尻、横川目、大石の三驛とす、川尻の如きは驛を巨る一里半澤内村ありて殆んど村民の大部分が製炭の業を營み楢八分雜二分の割合にて黑炭は角俵として全産額の九割を占め白炭は丸俵にして一割程度なり

川尻驛移出商　和賀林産株式會社、菅原喜七商店、阿部竹治出張所

横川目驛は川尻に劣らず前途にありては寧ろ川尻を凌駕すべしとあり、此地に横黑薪炭組合あり横川目と黑澤尻の移出商を網羅し事務所を驛前の小田島貞治氏方に置き業者協調のもとに製品の改良に努めつゝあり

横川目驛移出商　小田島貞治、佐藤甚平、小原昇、小原富治、山内與七

水澤驛

往昔は堅炭の移出地にして優良品を供給したれども今は大半黑炭と化し堅炭は形跡を止むるのみなり、生産地は江刺郡藤里、淺井、伊手、米里の村落にして岩谷堂町の當業者に依つて移出す年額四十八萬貫を算す外に松炭の産出ありて埼玉縣川口町の鑄物工場へ仕向けつゝあり黑炭七分堅炭四分の割合なるが如し

移出商　和賀榮助、和賀源吉、村井邦輔の三店岩谷堂町に商舗を構ふ

一の關驛

一關より市場へ供給する薪炭の産地は東磐井郡猿澤、興田の兩村並に大原町を圍ふ林源地と西碧井郡の一圓にして年移出額百二十萬貫を示せり品種は黑炭七分堅炭三分にして黑炭にありては萱丸俵造りを殘存し寧ろ丸俵多數を占む量目は岩手縣木炭檢査所の制に則り楢正味五貫雜正味四貫なり此地業者の協調結束を維持する爲大正十年一月一關薪炭商組合を設置し伊東孝吾氏組合長に擧げられ檢査所と氣脈を通じ製品改良促進の上に努力を注ぎ一面組合員の和衷協同に貢献しつゝあり

主なる移出商　伊東孝吾商店、宮本利藏商店、千葉與三郎商店、西尾幸右衞門商店、西澤萬藏商店、柳澤金四郎商店等を重しとす又西磐井郡平泉驛に佐々木馬吉商店、達谷窟恂太郎商店あり

小野寺式製炭元祖

於一道六縣共進會壹等賞受領

岩手縣一戸町

商標

中村龜次郎商店

輸出驛　一戸驛　沼宮內驛　福岡驛
奥中山　小鳥谷驛　小繋驛

木炭木材柏皮製產移出

岩手縣一戸町

商標

浪岡藏助商店

電信略號（ナミ）

木炭肥料雜穀商

岩手縣一戸町

商標

中島萬次郎商店

電信略號（マン）

南部鐵瓶製造販賣

優良木炭の需に應ず

岩手縣一戸町　高見虎五郎

振替東京　八六六四番

木炭製造和洋小間物

盛岡市材木町三十一番地

登録商標 一

石川與七商店

電話五三一　電略（イシヨ）

大正式改良其他各種

岩手縣九戸郡葛卷村

薪炭輸出 二

三浦榮五郎商店

輸出驛　小鳥谷驛　沼宮內驛

改良黑炭角俵移出

岩手縣沼宮內驛前

薪炭製造 三

三橋兵三郎商店

電略（ミ）又ハ（ミハ）

◇改印 改良木炭各種

材木鐵道枕木移出

齋藤新吉商店

岩手縣沼宮內町

木炭米穀商

岩手縣沼宮內町

尾花屋 久保松壽

電略（クホ）又ハ（ク）

木炭輸出商

岩手縣沼宮內町

商標 井 向井春吉商店

電略（ムカイ）又は（ム）

薪炭商 中目直也商店

岩手縣花卷川口町

電話 七十二番

電略（ナカ）又は（ナ）

商標 Ⓚ
薪炭輸出 北山商會
岩手縣花卷川口町

木炭薪移出
商標 金
岩手縣花卷川口町
高橋金太郎商店
電話二番 電略（タカ）

改良黑炭角俵と堅炭
木炭輸出商 ㊀
岩手縣岩手郡御明神村
工藤善太郎
電略（クドオ）

木炭酒類雜貨
卸小賣 ㊀
岩手縣岩手郡御明神村春木場
福井一郎商店
商號 伊吹屋

角俵
丸俵
土竈堅炭
盛岡市茅町六七
石川三郎
電略（イシ三）

木炭移出商
岩手縣岩手郡
御明神村春木場
新黒富次郎
電略（ニイ）又は（ニ）

堅炭輸出問屋
岩手縣岩谷堂町
和賀榮助

木炭問屋
盛岡市外上小路
田澤德太郎

木炭移出
吉田清七
盛岡市新馬町

木炭輸出
堀口治郎衛門
岩手縣一戸町

東海岸生産地

岩手縣の主産地は東海岸筋下閉伊郡内を重しとし全縣下産出額の約四分の一は同郡の製出にかゝり宮古以北は青森縣八戸湊の移出商を介し宮古以南は宮城縣鹽釜港の移出商に依りて消費都市へ供給せられつゝありしが時勢の推移に伴れて取引系統にも變革伴はれ時に生産地方營業者の共同賣の形式に依り或は規模大なるものゝ直接移出に依る等近時東海岸地方に於て中央市場へ向け若くは近郊消費地等へ向け直接移出を營むもの多きを加へつゝあれば本誌も亦此の主要生産地の狀況を報ずると共に移出業者を案内して取引相互間にの便に供せんとす、左に之より同地方を北より南にと順次報導することゝせん

普代港

此地は東海岸中陸奥堅に最も近き距離の關係より其八戸港との接近も早く木炭生産地としても他地に先ちて認識せられ明治四十二年の交には既に年額五六萬俵の移出を見るに至れり而して木炭の消費量の增加は生産を促進するの結果となり歐州大戰當時は年額二十萬俵にも達せる移出を示せしも

斯くありて一面薪炭林の過伐となり今日にては深山に伐り進みつゝあれば年々産額十五萬俵（七十萬貫内外）と見ば大差なかるべきも薪炭林蓄積の狀況よりせば次第に減少すべしと見るを適當とせんか

生産移出商　熊谷善六、熊谷精治、藤島吉十郎、佐々木清次郎、藤崎次郎、横田幸次郎、大上仲吉、大上忠次郎の諸氏を主しとす

平井賀港

同地に集散する木炭は稙割大多數にして次で雜割の順序なり丸物の如きは極めて少量なることは此地のみならず何地も同樣なりとす、同地林源にして最も嘱望せらるゝ地方は安家方面にして平井賀港より全通する里道の完成と共に曾て人跡を見ざる鬱蒼せる薪炭林の開發を見るべく現在年移出額十五萬貫の數量は之を長へに持續するを得べし

生産移出商　前原久太郎、林觀吾、工藤精作、大澤長五郎、中村孫作、新屋龜藏、熊谷彌助、泉山市太郎の諸店あり伺ほ雄賀には中島久藏、沼袋に菊地清太郎、熊谷乙吉の諸店あり

島ノ越港

岩手縣下閉伊郡田野畑村島ノ越は全村悉く薪炭林を以てせる生産地にして殊に海濱に接し居れり木炭生産の最も旺盛を極めしは大正七八年に當時は年移出量十萬貫を下らざりしと云ふも、漸次減少の傾きなきにあらず、而して此の地は猿山と稱する一千町歩に近き大森林あり一昨年工藤利三氏外數氏に依て開發に着手せるのみなれば今後の産額必ずしも悲觀に及ばざるべし、尚ほ同地方は比較的若木多ければ細木の丸物を多く産出し品質も從つて優良なるものあり、製炭法には小野寺式及びカタン式行はれつゝあり

生産移出商　畠山市太郎、和山與次兵衛、工藤利三、和山民藏の諸店あり多くは八戸港の移出商の手に委しつゝ來れり

岩泉村概況

岩泉村は小本港を距る西に四里二十七町小本川に沿へる地にして東北本線小鳥谷驛より小本に通ずる縣道里程三十里沿道の林産物は小鳥谷へ出づるものゝ外は此の地商人の力を經由して小本港に集

散さる、岩泉は宮古に亞ぎ商業殷盛の地にして木炭の生産に於ても郡中屈指たり、生産地は有畛、大川、中津、甲和田、小川の各村を主とし安家地方よりも年額二萬五千俵内外の産あり、搬出濱下けは小本川の舟楫又は車馬に依り小本港へ出す、林源の蓄積にありては里に近き幼齢樹は既に伐り盡したれども深山大樹にありては殆んど無蓋藏に近きものあり近時製炭法の改良に意を注ぎ且つ炭材の調製にも周到の注意を拂ひつつあれば從來のそれに比し製品は著しく面目を改めたり、同地方には久慈町中野吉郎商店の製炭所又湊物産株式會社も前途に嘱目し製炭事業地を設け居れり、而して岩泉に集散の木炭は年額十三萬貫に達す

生産移出商　中川重三郎、工藤市助、高瀬茂市、佐々木鷲治、佐藤梅吉、藤田勝次郎、松本寅松以上の諸氏の外

販賣業者としては工藤治六、中村五郎の兩店あり、又大川村に畠山甚太郎、中館幸助、田代喜一郎の三氏、小川村

野館市太郎氏在り

佐藤竹藏商店の規模

同店は郡中に於ても最も古き歴史を有する木炭製造移出商にして大正元年の交田野畑方面の林地が製炭に適せるに着眼し立石室場の山林に手を染め製炭の業を開始せるが相場の變動等に逢ひて一時

は苦境に陥りしこともありしが精力奮闘主義の氏は何物にも屈せず遂に運命を挽回することゝなり大正四年に至るや現在の小本港に店基を移し岩泉の奥小川村に約七十萬俵出炭見込ある大森林を占有し二十ヶ年計畫のもとに製炭事業を開始せり齢七十に垂んとするに自ら事業地を巡察し使役人の監督に努むる等氏の如きは木炭界異數の精勵家と謂ふべし

小本港

小本港より八戸へ供給せらる、木炭の年額は二百萬貫と稱せり此の地へ集散せらるゝ木炭は前述の岩泉地方を主とし更に中島、中里の兩村よりも製出す、小本港は岩手東海岸中宮古に亞ぐの移出港なるも灣内狹小にして且つ浪荒く天候不良の時には多量の停滯を來す場合もあり

生産販賣業者　佐藤竹藏、工藤多藏、金澤彦七、筋石安五郎、黒澤歳太郎、三浦城藏、加藤三藏の諸氏あり

田老港

田老は宮古と共に木炭改善の先進地にして岩手縣が縣營に依る木炭の檢査を行ふに先ち田老木炭同

業組合の設置を以てし自發的に製品の改良統一に努め縣營檢査實施の後と雖も尚此の組合は今に存續し業者の親睦を旨とし縣の檢査と相俟つて木炭の改良促進の上に寄與しつゝあり田老木炭年產額は二十萬俵と稱せられ近頃に至りては品質優良を以て中央市場に聲價を認めらる

主なる移出商　小幡松之介商店、佐々木半治商店、赤沼喜兵衛商店、佐々木岩松商店等を數ふ

宮古港

岩手縣下閉伊郡を代表し其中樞集散地として年額六拾萬俵を消費市場に供給しつゝありて、其生產地は川屋、和井久、川井、津軽石の各村を主とせり、數年前までの宮古物と稱すれば炭材の調製甚だ粗にして且つ加ふるに製炭法の未熟なる等より中央市場の虐待を受け居りしことすらありしが、宮古木炭檢査所主任に淺沼久氏を得て以來、同氏の奮闘的努力と當業有識者の共鳴と相俟つて長足の進歩を來し殊に大正十四年の春より宮古林業株式會社戸塚山事務所を中心とし小野寺式製炭講習會を開き尚ほ宮古檢査所管内各所に於て長期講習會を開催するありて、其改良されし事蹟は大正十四年九月下旬盛岡市に開催せる北海道參加東北六縣木炭共進會に於て二百餘點の出品に對し壹等賞參點、貳等賞四點、參等賞拾八點、四等賞五拾六點合計八拾壹の入賞を贏ち獲たり、尚ほ宮古には去る大正七年創立にかゝる宮古木炭同業組合の設置あり縣營檢査實施と共に活動財源を奪はれしも組合員の結束固く製品改善の上にも亦克く貢献しつゝあり今組合の最高幹部とも稱する役員を紹介せば左の諸氏なり

組長岩田德右衛門、副組長小幡仙次郎、顧問宮古檢査所主任農林技手澤沼久、顧問菊地清兵衛、理事加藤平三郎、橋喜和太、藤島千次郎、評議員宮古林業株式會社支店、鶴安太郎、大土善太郎、蛇口嘉郎、阿部安之助、岩船營造、鴨本岩松、母衣岩軍次郎、青木繁藏、山根仁左衛門

移出商　冠たるは宮古林業株式會社宮古支店を筆頭に龜安太郎商店等手廣く供給しつゝあり尚ほ優良品製炭者としての冠たるものに青木繁藏氏あり一道六縣共進會に於ても壹等に入賞せり製品の大部分は鹽釜港菊地平吉商店の特約販賣にかゝり居れり尚津軽石村に長洞万次郎、豊間根村に木村勇造、花輪村に佐々木孫之助の諸氏あり又刈屋村信用生產組合は近時專ら木炭の製造並に販賣に力を注ぎ小山田舜二氏組長たり

小國村の概況

宮古港へ濱下げする產地中の著名なるものに小國村あり川井村と隣接し岩手郡界まで密林連續し未だ嘗て斧鉞を加へざるの狀況にあれば全く無盡藏と謂ふべく山林面積は川井村七方里小國村八方里と稱せらる、盛宮鐵道敷設の曉は好望視せらるべし、製品は楢八分雜二分の割合にして現在にても

兩村の産額十五萬貫を下らざるべし

生産移出商　川井村に八木重助、母衣岩直人二氏あり小國村に佐々木兼松、小向牛次郎、吉見友太郎、香西八郎澤田松太郎、山口重人の諸氏を數ふ

刈屋村の概況

刈屋村の薪炭林總面積は二萬町歩を超へ而かも公有林と民有林にして優良樹種に富み居れり、材積如何と云ふに立木の全部を石に見積らんか少くとも壹千石以上に達すべく一石二俵と見ても千七百萬俵を産出すべく一年五十萬俵つゝと假定し向ふ三十四年保續すべしとあり、東海岸の生産地として最も主きをなすの地たり

生産移出商　宮古林業株式會社の製炭所あり、尚ほ加ふるに山田栄次郎、龜山初太郎、駒井孫八、橋本要八、藤原健治、戸花喜三郎の諸氏を重しとす

茂市村の概況

茂市村も亦薪炭材に富み面積四方里全部が民有材なれば樹質も亦優良なり大正七八年の好況時代に於て過伐の傾きなきにあらざれども深山は未だ全然斧鉞を下さず目下の處搬出上の不便あれども盛宮鐵道は茂市に停車場設置の豫定なりと言へば開通の曉にも到らば豐富なる材源開發せられ木炭の供給地として重きをなすに至るべし、目下年産額八十萬貫に上り大部分は楢割にして次ぐに楢丸とす、尚は此の地よりは少量の白炭を産し東京、埼玉、千葉、茨城等へ供給す

生産移出商　發岩重次郎、橋本寅松の兩舗と宮古林業株式會社へ供給する大平益三氏等あり其他は副業者なるが如し

山田港

山田港は宮古、田老に亞ぐ木炭の移出港にして、年移出額一百萬貫を下らざるべし、生産地は豐間根村を主とし、田名部、織笠、大浦、石濱の各部落之に次ぐ、同地は宮古、田老と共に準則組合の設置ありて縣の檢査と相携へて製品の改善に努力しつゝあり、殊に此の地方は原料林所在地に近く一里半乃至三四里の近距離の地多ければ搬出至便なると共に荷傷みの度も少なきの理なり而かも此の地に製炭技術に長ぜる渡邊貞治郎氏在り兩三年前より改良技術の普及に勵精し自己の製品の改良を圖るに止まらず山田港移出木炭の聲價を揚ぐるには一齊的の改良を要すべしと努力を注ぎつゝ來

れることは山田港木炭の改善の上に與つて力ありと云ふべし

生産移出商　阿部忠治、齋藤健次郎、坂本治太郎、阿部誠喜、佐藤清一、鈴木市藏、佐藤忠太郎、渡邊貞治郎の諸氏を數ふ

渡邊貞治郎氏の閲歴

氏は福島縣双葉郡大久村の産、幼にして製炭の業に意あり、十五歳の時既に製炭の業に從ひ明治四十二年の交には福島縣双葉郡上川内村に於て製炭の業を經營し富岡及び長塚の兩驛より中央市場へ移出せり、超へて大正元年に及ぶや業務を擴張して、宮城縣牡鹿郡女川村の薪炭林を購入して事業を此處に開き、一面にありては鹽釜港に出張所を設けて岩手縣東海岸產木炭の仲買を營む等各方面とも事業は順調に進みつゝある一面には岩手縣三陸沿岸の好望なるに見て、事業の全部を山田港に集中せしむべく決意して大正二年八月十五日より此の地へ移り三ヶ所の製炭事業を經營し製品は角俵に改め東京横濱の兩地へ移出をなせり、偶々時代の要求する處は同業者の結束せる力を以て製品を改良統一すべき必要を痛感することゝなり、時は大正五年三月山田木炭同業組合の發起人となり有志を叫合して其創立を完成せしめたり、氏偶々惟へらく製炭法の改良は消費都市の嗜好を探究すると共に製法の改究にありては先進各生産地に就いて視察を遂げ各種製炭法の長を採り短を補ふの要あるべしとなし、消費地としては東京、横濱、千葉、埼玉を、又生産地としては宮古を中心とし下閉伊郡主なる産地竈元を歴訪して技術を究め時に自ら進んでは製炭講習會に受講生となる等、殊に大正十年七月新潟縣山林會主催の講習會に於けるが如きは見學の爲め當局に請ふて參加するが如き遂に黒炭にありては渡邊式の名稱さえ唱へらるゝに至れり、次いで新潟縣が笠松萬藏氏を講師として長期講習會を擧行せる時の如きは氏は選ばれて助教師として參與せることすらあり、斯くして製炭技術の改善普及に就いては渾身の誠意を斯界に注ぐと共に自己の製炭移出業にありても毫も手を緩むるなく勵みつゝ來れり、氏の如きは、正に三陸地方木炭改善の先驅者と稱するも過言ならざるべし

豐間根村の概況

同地は山田港を巨る二里十八丁の地點、製炭全盛時代は炭材の不足と共に經過したる觀なきにあらざれども一萬七千町歩の廣大なる國有林は密林の狀を呈し居れば深山尚ほ厭はざらんには年額十五萬貫程度を持續するには不自由を感ぜざるべし、林源は比較的若木なれば優良品を產出す、山田港

移出濱下け移出をなす

生産移出商　木村勇蔵、木村喜十郎の兩氏尚は津輕石村に山根仁左衛門、磯合與右衛門の亘商あり

大槌港の概況

産地は金目内山、姥ヶ澤、清水、栗林方面にして數年前までは木炭の生産に主きを置かず土地需用の外は僅かに銚子方面に仕向くるに過ぎざりしが近時財界の不振に伴ひ林産收入を木炭に依るの傾向となり年産額十五萬貫内外を産出するに至れり稽少く雜木多し、鹽釜港へ仕向く

生産移出商　金崎嗣吉、岩間貞次郎の兩店を主とし尚ほ鵜住村に二本松久商店あり

越喜來港概況

嘗ては海産にのみ親しみ居れる地なりしが大正六年の交より木炭の前途有望なるに嘱目するものを出し豐富なる林源は以て開發せらるゝに至り今や年産額十五萬貫を下らざるべし

生産移出商　立根村の村上陽之進氏此の地に店舗を有し旺んに生産せらるゝ外、追川米藏、中井清太夫、井筒庄三の諸店あり尚又吉濱港に土屋彦治、菊地藥作の兩舗あり生産移出を營む

大船渡港概況

岩手縣氣仙郡は雜木角俵正味四貫氣仙物と稱し今や東北雜角中群を抜くの聲價を博し鹽釜港へ航運せられて京濱市場へ供給せらるゝ一面には時に發動機に依りて千葉縣銚子港へ仕向けらるゝこともありて年産額百二十萬貫を下らずと稱せらる、産地は立根、猪川、日頃市の各村にして世田米村の産の一部も此港に搬出さる、同港移出木炭が粗造濫製時代を脱して今日の聲價を認めらるゝに至れるは去る大正十一年二月製品の改良統一を主眼とする氣仙郡木炭業組合の創立を見て、此の組合が當業一致の歩調に出で來りしを以て木炭の改善が促進せられたるものなりとす、　や需用地の傾向は優品執着主義に變じ假りに低廉價なりとするも粗品は全然迎へざる傾きなれば、今日の聲價を維持すべきは勿論更に進んで其向上に努力すべきなり

生産移出商　中井元治、熊谷長左衛門、新沼眞、新沼與三郎、老川半左衛門、老川秉松、八木敏の諸店を數ふ

盛町概況

盛町は大船渡港を離る僅かに二十丁氣仙郡自治の中樞地にして木炭にありては大船渡港へ出荷すべ

き立根、猪川の兩村並に同町を包圍する各産地の製品通過の地たり、大正七八年の木炭旺盛時代に過伐せる結果は年次減少の傾向ありて此地移出商には越喜來、日頃市方面に轉換しつゝある狀況なり、現に囑目を拂はれつゝある生産地日頃市村は大船渡港より約一里十八丁の地點にして山林面積は民有材のみにても九千町歩を蓄へ且つ國有材に包擁せられ、大樹の國有林を除ける私有林は二十年程度の若木なれば丸物を多く産出す、稍雜相半ばせる産額を示し雜丸雜割の如き岩手縣南海岸を通じての一流品としての聲價　放ち居れり

生産移出商　盛町に鈴木章助、千葉藤右衞門、甘竹太助、千葉善之助の諸店を數へ、立根村に村上陽之進商店の外、金野半四郎、金野豐助、佐々木傳治の諸店、猪川村に美濃寅藏、村上庄平の兩店あり、又日頃市村に到れば佐藤萬次郎、清水吉四郎、兩舗の外佐藤七三郎、佐藤文五郎、新沼勝也、伊藤庄五郎、伊藤喜太郎、杉山林藏の諸店あり

長部港概況

氣仙郡中に於ける木炭移出港としての首位にあり年額百八十萬貫内外を示せり、生産地は横田、世田米、五有住、下有住、矢作の各村にして釜石鑛山用に供せらるゝ當時は主として製鐵用向粗惡品のみなりしが製鐵業の不振と共に從來の販路をして中央消費市場に展開せざるべからざる必要に迫られ氣仙郡木炭業組合の支部としても活躍し當業者の自覺を促がし改善に努めたれば今日にありては全然昔日の影を脱し雜木角俵の如きは大船渡集散品と相俟つて優良の聞えあり

生産移出商　菅野軍記、菅野文吾、小島覺治、村上喜一郎、菅野友助、近江福治の諸氏あり尚ほ隣接高田町に高田商事株式會社、佐藤常助の兩舗、脇の澤に到れば大仙金五郎商店あり

上下有住方面

上有住、下有住、世田米の三村は釜石鑛山の近傍なるを以て古くより鑛山に供給し來りし關係より林源も伐り盡したる跡の成朱せる若木多く製炭法に就いても餘りの訓練を要せずとも良品を製出し得らるゝも　なるに、矢張り製鐵用粗惡品に馴致せる舊套は容易に脱するを得ずして末炭化の評を受け居りしこと久しかりしが、近時需用地の趨向が良品を迎ふるに到りたると他地方の改善に刺戟せられて漸く面目を一新するに至れり、同地方産は長部港を經て市場に供給せらるゝ分量多く年産額八十萬貫中の二十四五萬貫は岩手輕便鐵道に依りて中央市場へ移出さる

生産移出商　世田米村に紺野福三郎、菅野定吉、菅野勇助の諸店あり、下有住村に立花傳吉、吉田周右衞門、千葉清の諸店、上有住村に佐々木象一郎、佐々木嘉兵衞、小泉勇右衞門の諸店を數ふ

宮古改良角俵並に木材製造

商標

岩手縣下閉伊郡官古町

小幡仙次郎商店

電略(オハタ)又は(セ)

岩手縣下閉伊郡小本港

商標

木材製板
木炭製造

工藤多藏

電略(クー)又ハ(ク)

木炭生產移出商

事業所 岩手縣下閉伊郡川井村、腹帶

岩手縣下閉伊郡茂市村

畏岩重次郎商店

電略(ホロ)又ハ(ホ)

特製楢角木炭製造輸出

商標

橋本屋號

橋本岩松商店

岩手縣下閉伊郡茂市村

電略(ハシ)又ハ(ハシモト)

二 印 木炭生産輸出

岩手縣下閉伊郡田野畑村平井賀
薪炭問屋 前原久太郎商店
電信略號（マイ）又ハ（マ）

岩手縣下閉伊郡川井村
木炭桐材 木材毛皮商 八木重助
電略（ヤキ）又ハ（ヤ）

木炭生産輸出

岩手縣氣仙郡盛町
甘竹太助
電略（ア）又ハ（アマ）

岩手縣下閉伊郡山田町
薪炭問屋 坂本治太郎
電略（サカ）又ハ（サ）

木炭移出商

宮古屋號
齋藤健次郎
陸中山田町

岩手縣下閉伊郡宮古町
木炭商 佐藤屋商店
電略（サト）又ハ（サ）

木炭、木材、枕木

陸中下閉伊郡岩泉村

松森寅松商店

電略(〇マツ)又ハ(マ)

商標

岩手縣氣仙郡立根村

木炭生産輸出問屋

村上陽之進商店

電略(ムラヨ)又ハ(ム)

木炭製産

岩手縣氣仙郡世田米村

菅野定吉

振替仙臺七五一番

電略(〇カ)又ハ(カ)

木炭木材商

岩手縣氣仙郡盛町

鈴木章助

電略(ヤマキ)又ハ(ス)

木炭製產移出問屋

岩手縣氣仙郡日頃市村

佐藤万次郎

輸出港　大船渡港

木炭輸出商

陸中宮古港

亀安太郎

電略（カメ）又ハ（カ）

木炭輸出商

岩手縣下閉伊郡小國村

佐々木兼松

電略（サ）又ハ（カネ）

木炭木材商

岩手縣下閉伊郡田老港

小幡松之介

電略（ヲ）又ハ（マツ）

木炭、木材、枕木生產

岩手縣下閉伊郡岩泉村乙茂

藤田勝次郎商店

電略（フジカツ）又（フ）

米穀木炭商
陸中宮古町
岩德商店

木炭柏皮商
岩手縣下閉伊郡田野畑村
和山與次兵衛
電略(ヤマヨ)

木炭桐材商
岩手縣下閉伊郡岩泉村
中川重三郎
電略(ナカ)又ハ(ナ)

カタン式
自製木炭製産
岩手縣下閉伊郡田野畑村
畠山市太郎
電信略號(一)
島之越出張所

木炭製造輸出
岩手縣下閉伊郡川井村
袋岩直人
電略(ナホ)又は(ナ)

木炭生産輸出
岩手縣下閉伊郡田野畑村
猿山木炭製造業組合
主任工藤利三
製産地田野畑村濱岩泉

木炭生産輸出
岩手縣氣仙郡世田米村
紺野福三郎
電略(コン)又は(コ)

製炭製材
岩手縣宮古町築地通
染谷代助
電話二五番
振替東京一八六六七

木炭移出商
陸中田老港
龍鼻喜代松
電略(タ)又ハ(タツ)

木炭輸出商
岩手縣下閉伊郡田老
佐藤左輔
電信略號(サ)

木炭仲買業
陸中下閉伊郡田老
川戸政八
電略(カワト)又ハ(カ)

木炭輸出商
岩手縣下閉伊郡田老港
内田榮次郎
電略(ウチ)又ハ(ウ)

木炭輸出商
岩手縣下閉伊郡田老港
畠山慶次郎
電略(ケイ)又ハ(ケ)

木炭生産移出
岩手縣下閉伊郡鵜住居村
木村勇造
電信略號(キムユ)

新渡邊式伏燒式
新大正式各製法

改良木炭
輸出問屋
渡邊商會

岩手縣下閉伊郡山田港

店主 渡邊貞治郎

電略(ワタ)又は(ワ)

宮城縣

宮城縣に於ける一ヶ年木炭の産額は九百五十萬貫内外にして之れに岩手縣産にして鹽釜經由のもの一年五十萬貫を加ふるときは一千萬貫を示すに至るべく、縣内生産地は刈田郡を首位とし玉造、柴田、加美、登米、宮城、牡鹿の各郡にして縣は木炭の改善統一を期すべく各郡に同業組合を設置し其成るの曉に於て之を聯合すべく宮城縣木炭同業組合聯合會の設置を促がすべく奬勵斡旋怠りなきものあるも未だ其域に達せず、然れども同業組合設置地區の製品は往昔と異なり製品の面目を向上するに至れり、之れより、移出地として最も主要なる鹽釜港より順次縣内主要地を紹介する事とせん

鹽釜港

岩手縣東海岸の産宮古を中心に地は八戸港を經由し南は鹽釜港を經て中央市場を始め各地消費地に供給し、東北本線の三戸、沼宮内、八戸湊の八戸港等と相俟つて中央市場との關係密接を極め年移出額約五十萬貫を數ふべし、其移出木炭は岩手縣宮古以商山田港より氣仙郡の各港移出木炭は此の地に陸揚げせられ貨車積となりて市場へ現はる、製品は岩手縣檢査規則に則れる菅角俵檜は正味五貫雜木は正味四貫にして近時宮古地方の改良促進せらるるに伴ひ鹽釜港移出商には其地に着目し生産者と特約を結び若くは隨時買付をなす等活躍せられつゝあり

主なる移出商　菊地平吉商店、永田龜吉商店、池田哲三商店、佐藤儀平商店、高橋商店、鱗一商事株式會社等を數ふ

仙臺市

仙台市は東北第一の都市人口十二萬を算す、此の地に消費さるゝ木炭は縣内刈田、柴田、名取、宮城四郡の産土釜堅炭を主とせるも漸次消費量の增加すると共に岩手縣三陸方面の角俵を始め福島縣海岸線、北海道産十貫土釜大俵等移入し今日の狀況よりせば七割は縣外産なるが如し一ヶ年消費量は四百萬貫に達せり

薪炭商　薪炭販賣商の主なるは東三番町に鱗一商事株式會社支店、鐵砲町に樞浦留吉、東二番町に篠田木炭部、穀町に赤羽信太郎、三百人町に菅原彌三郎、通町に高橋清吉、穀町に佐藤啓商店、宮町に關宇三郎、新河原町に佐藤松之助、市外原の町に熊谷長九郎、佐藤半四郎、河原町に岩間榮吉、五番町に鈴木政吉、連坊小路に柏屋商店の諸店とす

石巻町

同地は移出量一年百五十萬貫と稱せられ東京、八王子市、千葉、埼玉、茨城等へ供給さる、生産地は岩手縣南海岸氣仙部の各港、山田、宮古を始め東磐井郡の産、縣下登米、本吉の兩郡等の製品にして、同時に此地及び村落の消費量も近時增加し來り一年百二十萬貫を示すに至る

移出商　石巻仲町に高橋仁吉、湊に高須賀武之助の兩店を主とす

米谷町

宮城縣米谷町より北上川の水運を經て鹿又驛より移出せらるゝ木炭は新田角俵として令名を得たる木炭は此の地より供給さる年額百三十萬貫と稱せられ東京市を始め千葉縣各地、埼玉縣下、縣内消費地福島市等へ移出す、産地は登米郡米川村、本吉郡三岳村、岩手縣東磐井郡大坪村等より集散さるゝものにして選別宜しきに適ひ量目又正確なるを以て一時に聲價を博するに至る、而して今日に至りては聲價を維持せるには相違なきも東北各地の改良に壓倒せられし傾きあり一段の努力を要すべきことなるべし

移出商　沼田忠太郎氏を筆頭に渡邊幸次郎氏等を主とす

中新田驛

宮城縣加美郡木炭同業組合地區内産は主として此の驛より移出す近時同業組合は各地に製炭講習會を開き改良に腐心せらるゝ甲斐あつて面目を一新するに至る、殊に郡内の主産地なる小野田村鹿原には生産者の共同販賣組合の設けあり今野喜三氏組長として活躍す、中新田驛より移出量は今や年額三十萬貫にも達せんが他は縣内の消費なり

移出販賣商　中新田町に三浦東三郎、小野田村に今野喜三、今野恂一郎、今野春治、色麻村に手廣く營める鈴木兵之助商店あり以上の諸店を主とす

池月と鳴子驛

宮城縣玉造郡池月驛よりは黑炭角俵を移出し年額三十萬貫内外の數量なり産地は栗原郡花山の林地にして民有林は若木なるも官有林の大樹の嫌あり澤口一郎氏等同地に活躍の跡を見る又鳴子に至れば鬼頭の林源を控へ近時澤口一郎氏の事業地を設くるあり遊佐善三郎氏の横濱市の堀内太郎吉氏と

携へ營める形跡をも存す年移出額池月に超越す

白石驛

大正十一年九月より製炭檢査を開始するに至れる宮城縣刈田郡木炭同業組合地區内産出木炭の約八割までは白石驛より移出す、刈田郡産は稱して白石物として市場に知らる、一年移出量は黑炭に於て百二十萬貫白炭に於て八十萬貫の額に達せり、産地は小原、七ヶ宿、遠刈田、福岡、深谷、八宮の各村にして林深の多くは樹齡幾百年と云ふ大樹の官有林にして唯小原村の一部民林より若木優良品を産せり、一俵量目は黑丸俵三貫七百目、黑角俵四貫五百目、白炭四貫三百目とせり

移出商　鈴木德太郎、遠藤宗五郎、遠藤鶴治、阿古島啓助、草野善助、藤井德市、岩間慶吉、大友與五郎、今井龍次郎、日下小物治、高橋藏之丞、小島清助、大槻平助、佐藤仁平の諸氏を主しとす

秋田縣

秋田縣に於ける一ヶ年木炭の産額は一千三百萬貫と稱せられ供給先は中央市場を主とし次ぐに茨城

木炭木材問屋

鹽釜經由岩手改良木炭

宮城縣鹽釜町四百八十八番地

商標

菊池平吉商店

木材部主任　餅長藏

木炭部主任　鈴木喜作

電話四十八番

電話（キ　ク　ヘ）

薪炭木材
米雜穀海産物
官鹽元賣捌

問屋 石之卷屋商店

岩手縣高田町

電話九番 電略(サ)

石之卷屋船舶部

宮城縣鹽釜港

石之卷屋鹽釜出張所

佐藤喜藏

電話二五二番 電略(サ)

木炭
輸出問屋

宮城縣鹽釜港

㊤ 高愛商店

電話七一番 電略(〇エ)

振替口座仙臺三一一五番

新炭繩問屋

宮城縣鹽釜町

△ 鱗一商事株式會社

電話一四八番

支店 宮城縣仙臺市東三番町通角
岩手縣宮古町繁地通(電話五六番)

改良角俵木炭

輸出商　宮城縣鹽釜町

池田哲三商店

木炭輸出商

永田龜吉

陸前鹽釜港地濱町

木炭商

宮城縣鹽釜宮町

佐藤儀平

電略（サ）又は（サト）

白石物 白炭 黒炭 移出商

宮城縣刈田郡白石町

薪炭問屋 栗木材商

遠藤宗五郎商店

木炭輸出

宮城縣石卷町新田町

高仁商店

振替仙臺八一五番

薪炭問屋

岩手縣產古釜角俵元組

橋浦留吉

仙臺市鐵砲町一四四

木炭商

宮城縣石卷町湊

高須賀武之助

新田改良角俵移出

株式會社 河東物産商社木炭部

沼田忠太郎

宮城縣登來郡米谷町

埼玉、千葉、神奈川、等の消費市場へ仕向く、中央市場にありては秋田縣産白炭は到る處之を見ざるなく、黒炭にありては岩手縣を主とし白炭にありては秋田縣産を主とせる狀況なり、量目は大俵八貫とし小俵を四貫に統一し縣下各郡に同業組合設置せられ之を聯合せる秋田縣木炭同業組合聯合會の組織ありて、生産檢査は各郡の同業組合に於てし移出檢査は聯合會に於てなせり、今大俵八貫を主とせる移出地と小俵四貫を主とせる移出地とを大別せば大俵は北秋田郡を最多とし大俵十三に對し小俵は三の割にて、次ぐに平鹿郡の大俵四に對する小俵三の割合なり、小俵は雄勝郡を最多とし主として小俵を以てし、次に仙北郡にして小俵十五に對し大俵は一の割合なり、次に山本郡にして小俵十四に對し大俵は四の割合なり

産額の順序よりすれば北秋田部を最多とし次ぐに山本郡、仙北郡、雄勝郡、由利郡、平鹿郡、河邊郡、南秋田郡とす、品質にありては平鹿郡の如きは秋田備長とも稱する優良品を産出し市場に聲價あり尙ほ秋田縣は從來の水消の弊は全然跡を絶ちし此の機會に於て八名式石窯燒に改めつゝあれば面目を一新し來れり、而して今縣下を通じ大俵と小俵と白炭と黒炭等の産額を其縣山林會の調査に成る大正十三年四月より十一月までの八ヶ月間の數量別を掲ぐれば左の如し

白炭	六〇七四五七俵	黒炭	三〇四七一俵

白大俵	二二八〇八俵	白黑小俵	四〇一二八七俵

更に主なる移出驛に就いて其移出量の概算量と供給荷主の主なるものを示せば左の如し

雄勝郡院内驛　主として賣丸俵白炭四貫にして年額三十萬俵を移出す、荷主には高田律雄、藤越理吉、林貞治、山田丈之助の諸店あり

雄勝郡横堀驛　白炭としては一萬俵内外と外に少量の黑炭をも移出す、荷主に佐藤禮助、妹尾悌助の兩店、秋の宮に青德治商店あり

雄勝郡湯澤町　林源平次減少の傾向にて一ヶ年四貫俵八割八貫俵二割の程度にて一萬二千俵内外の移出を示す木村幸右衛門氏の獨舞の感あれど、西馬音内町に佐藤榮之助、黑澤丹治の兩氏の活躍を見る

平鹿郡大森町　沼館町と共に秋田備長とも稱し優良品の移出地なり、主として八貫俵なるも近時小俵の製出を奬勵しつゝあり、年移出額六萬俵を數ふ、荷主には大森町の赤川運藏、柴田養太郎、備前留五郎、赤川運吉、柴田常吉の諸店あり、沼館町に畠山弘商店ありて製品改良を進め販路の擴張に努めつゝあり

仙北郡角館町　大曲驛より岐れて角館驛に至る仙北郡産の集散地たり、年額三十萬俵を積出し主として四貫俵八割、八貫俵二割の程度なり、荷主には金谷文六、富木壽吉、太田安太郎、加賀谷松次郎の諸店あり

仙北郡刈和野驛　主に四貫俵にして年額八萬俵内外を移出す、荷主に佐々木正治、加藤隆吉、池田雩治、加藤米藏の諸店あり

南秋田郡五城目驛　蕨角大俵八貫物を主とし年移出七萬俵に達すと云ふ、荷主には畠山仁三郎、荒川權太郎の互商の外に畠山喜市商店、伊藤謹爾商店等あり

山本郡能代町　此の驛より移出さるゝもの年五萬俵と稱せられ八森、澤目、塙川の産地の外に西津輕郡よりの移入品も混入さる、四貫と八貫との二種にして、荷主には鵜木萬之助、坂本廣吉、相澤彦左衛門の諸店あり

山本縣二ツ井驛　奥羽線中最多量を供給する地にして四貫小俵を主とし八貫大俵と共に年移出量四十萬俵と稱せらる、産地は主として米内澤方面なり、荷主には黑澤富五郎、畠山出張所、米内澤に秋田木炭株式會社、成田熹直の兩店雄を稱ふ

北秋田郡鷹巣驛　縣下最多の産地北秋木炭の移出驛にして八貫大俵を主とす、産地は米内澤、七日市方面にして荷主に田中米松氏あり氏は北秋同業組合の組長の職に在り營業振亦堅實なり

秋田市

秋田市一ヶ年の消費量は四百五十萬貫を示しその八割までは北海道産を迎ふる狀況にして縣内産は僅かに河邊、由利兩郡のものに過ぎざるが如し、此の消費地にして又偶々移出を營むものありて其縣内産河邊物の如き稀れに縣外へ仕向くあり

薪炭問屋として藤沼銀次郎、田口敬吉、竹内與吉、佐藤賢助の諸店あり

改良堅炭移出

秋田縣院内驛前

商標 越

高田律雄商店

電略（タカ）又は（タ）

木炭米穀雜貨

秋田縣平鹿郡大森町

赤川運吉

電話十七番

電略（アウ）又は（ア）

木炭移出商

秋田縣手鹿郡大森町

赤川運藏

電話五十三番

電略（アカ）

木炭移出商

秋田縣平郡鹿大森町

柴田養太郎

電話十二番

電略（ヤマニ）又（ニ）

木炭移出商

秋田縣平鹿郡大森町

柴田常吉

電話五十四番

電略（ツネ）又は（シ）

飯田式留釜堅炭
楢崎式土釜角俵

秋田縣大森町
㊂ 飯田利助
支店 東京市本所區元町
電話墨田三五六八

木炭移出商
秋田縣湯澤町
㊋ 木村幸右衛門
電話七十四番
振替東京一四六八七

木炭移出商
秋田縣五城目町
畠山仁三郎
電話一六電略(ハタニ)
出張所 鷹巣、二ツ井、早口

木炭製造移出
國際運送取引店
秋田縣二ツ井驛前
旭 豐澤富五郎
電略(トヨ)又ハ(ト)

仙北郡產木炭移出
秋田縣仙北郡角館町
商標 文 金文商店 金谷文六
特電話五六電略(カナヤ)又ハ(カ)
振替口座東京 三八四八七番

仙北郡產木炭移出
秋田縣仙北郡角館町
商標 分 木炭問屋 加賀谷松次郎
電話六十八番

秋田縣能代港町

薪炭問屋　坂本廣吉商店

電話一六六電略(サカ)又ハ(サ)

秋田縣能代港仲町

木炭米穀　相澤彦左衛門

電略(アイヒコ)又ハ(ヒ)

木炭移出商

商標 ㊞

石田吉之助商店

秋田縣米内澤町

秋田縣南秋田郡五城目町

木炭輸出商　荒川權太郎

木炭輸出商
秋田縣山本郡能代畠町
鵜木萬之助
電略(ウノキ)

木炭米穀藁工品
秋田縣五城目町
畠山喜市
電略(ヤマキ)

薪炭問屋
秋田縣雄勝郡院内町
林貞治商店

木炭商
秋田縣大森町
備前留五郎
電話五十二番

秋田市保戸野本町八番地
木炭問屋 竹内富治

秋田市下鍛治町
木炭問屋 佐々木梅太郎

北海道木炭特約販賣
秋田縣土崎港町五輪下
木炭問屋 加藤商店
電略(カト)又ハ(カ)

山形縣

山形縣に於ける薪炭の産地は最上郡を主とし縣下を通じ一ヶ年一千一百萬貫内外を算す、最上郡は最近に於て最上郡木炭同業組合の設置せらるゝありて陸羽東線沿道の産地を中心に著るしく改善せられ正味量目を四貫五百目とし等級制に則りて檢査を勵行しつゝあれば、從來山形縣産出木炭は諸官衙納品向として取扱はれつゝありしが改善の結果家庭小焚雜用に供せらるゝに至り其多くは堅炭なるも近時弗々黑炭の製出をも見るの傾向なきにあらず、以下漸を追ふて主なる移出驛を概報することゝせん

米澤市

米澤市は消費地にして縣外移出を營むものに市外舘山に沼部鹿藏商店あるのみにして、市内薪炭商として塚田運吉、小池運太郎、笹木榮太郎、伊藤嘉兵衛の諸店あれど、市内に消化さるゝ南置賜郡産並に新庄、及位等よりの供給と稀れに北海道産の取扱販賣を營み、縣外移出業者としては認むべきものなし

上山驛

南村山郡に於ける市邑にして消費地たり、縣外移出業者としては大久保藤四郎、高野久治、武田助次、川口五助の各店を數ふるのみとす、寧ろ北海道産木炭の供給を受くるの狀なれば郡内産の一部を栃木、茨城兩縣下へ仕向くるに過ぎず

大石田驛

大石田驛は正味五貫遣縣外移出量五萬俵内外を算せる移出驛なりしも近時林源缺乏に瀕しつゝあるを以て移出量を減じ唯僅かに栃木、茨城等へ少量の供給を見るに過ぎず、荷主としては運送を兼營せる十運送店、木内鎌太郎、鈴木茂四郎兩店を主しとせるのみ

新庄驛

新庄町は消費地たると共に一面移出地にして年額五十萬貫内外の移出あり樹種は大半雜木にして品種は主として白炭なり、生産地は金山、荻野方面なりとす、縣外移出を營むものに楠澤三之助、福

井利藏、大津久吉、森桂吉、長澤宜敏の諸店とす

眞室川驛

縣下を通じ主要なる移出驛にして陸羽東線向町に亞ぐの數量を示し年移出額一百萬貫と稱せらる、最上郡木炭同業組合地區内にして近時著るしく改良の歩を進め正味四貫五百目に統一さる、產地は安樂城及び金山の兩村にして雜堅多く仕向先は主として東京市場とす

移出商　松澤與五郎、伊藤市五郎、遠田彌市郎、梨本哲次郎の諸店あり、又金山村に佐藤桑三郎商店の活動さるゝあり、丹藥吉商店あり、小沼新吾商店あり、安樂城村には山共製炭部高橋榮力、伊藤茂平、佐藤富治の諸店あり

陸羽東線向町方面

山形縣の薪炭界に目ざすもの先づ多くは陸羽東線向町方面に着眼す、最上郡木炭同業組合地區内の中樞地にして從來は叺入大俵十貫物にして供給先販路も局限せられ栃木、群馬、埼玉、仙臺市等を主とし來れるも同業組合は東京市場向に改善を施し今日にては眞室川に亞ぐの聲價を博し、薪炭林の蓄積に於ても亦豐富なれば將來に矚目せられつゝあり、又長澤驛移出物にありては數量は年額三

山形縣米澤市外舘山

木炭製造移出商　沼部鹿藏

振替東京四四〇一一番

電略（ヌ）又ハ（ヌマ）

薪炭輸出商

羽前上ノ山町二日町

大久保藤四郎

電話七〇振替東京一四九九六

薪炭移出商

最上改良　山形縣最上郡向町

伊藤義治

電略（イ）又ハ（ヤマシ）

薪炭商　山形縣上ノ山町驛前

高野久治

薪炭問屋

山形縣新庄町十日町

福井薪炭商店

店主　福井利藏

電話一五八番

振替東京四二七二四

十萬貫内外に過ぎざれども同じく向町と同一徹にあり、富澤驛移出物にありては白炭黑炭相半ばし總じて年額三十五萬貫内外を移出せん、黑炭は正五貫造角俵にして中央市場へ仕向く

主たる移出商　向町驛に押切英雄、伊藤義治、五十嵐明治、小野庄作、飛島分店の諸店あり、長澤驛には叶内木炭店、富澤驛には見目、宮本、栗田、永井の各店あり

押切英雄商店

山形縣最上郡木炭同業組合の組織せらるゝ以前より向町に商舗を構へ木炭移出に志し開業六年餘面目なる發展振は益々斯業の基礎をして鞏固に導きつゝあり

福島縣

福島縣一ヶ年木炭産額は二千二百萬貫内外を示し磐城に屬する方面と縣南白河矢吹、棚倉方面は主として黑炭を産し岩代に屬する方面は所謂會津堅炭と稱し優良なる白炭を産す、又消費地としては福島市を中央に控ゆ福島縣當局の改善施設としては其産出木炭の種別と土地の狀況より區劃して各地に同業組合を組織し更に其各地同業組合を聯合し統一すべき福島縣木炭同業組合聯合會を組織され此聯合會の第一期事業として技術員養成に努め修業せるものゝうち成績優秀せるものゝ各地同業

組合の巡回教師又は實地指導員に配置し竈元指導と相俟つて生産の檢査を行ひ更に移出を行ふ方針のもとに着々其歩を進めつゝあり其黑炭に於ける濱三郡田村郡卽ち海岸線磐越東線の産にありては近時著るしく聲價を博し、東京横濱兩市場へ供給するの外埼玉千葉の兩縣下へ販路を擴め牢乎拔くべからざる地盤を獲得せるの狀況なり黑炭は以上の如く濱三郡と田村郡方面を主とし正味四貫五百目に統一せる切角横詰込の俵裝にして、此の包裝の點にありては近時著るしく美化し川前方面の製俵は先進地たる岩手縣を凌駕せるの狀勢にあり、白炭にありては主として會津一圓のものを良品とし之と東部中部西部との三つに分れ同業組合の組織ありしが之を一つに統一し會津木炭同業組合とせり、量目は正味四貫目瓦丸俵を用ひ品質概して優良にして東京市場にありては家庭小焚用又は料理飲食店等に於て本品を迎ふるほどに秀逸の地歩を占め居れり左に黑炭の移出地と（濱三郡田村郡方面並に縣南白河矢吹棚倉方面白炭の移出地會津方面）とに別ち案内の任を果さんかな

濱三郡

福島縣石城、双葉、相馬の三郡を地區とし組織せるを濱三郡木炭同業組合と稱し始めは移出檢査のみなりしが大正十三年六月より竈元改良指導に從事せると共に生産檢査を實施するに至れり同方面

は俗に海岸線物と稱し雜割角俵を主なる製品とし其全く改良されしものにありては東北產角俵を凌駕せる價格を以て取引せられつゝありて移出驛は勿來より植田を經て常磐線の沿線各驛ともに相馬郡原町を以て海岸線移出驛の終點とす。

移出商　勿來驛に根本庸次、植田驛に香取吉造、下山田浩一、平町に到りて大里金丸、平木炭株式會社、田邊平治、安藤金次、佐川辰次郎の諸店、木戸驛に到りて高原甚藏、渡邊操、久の濱に鯨岡義助、長塚驛に藤田小一郎、浪江驛に佐藤薪炭部、菅原薪炭店、渡邊勘之助、鹿野驛に大越三吉、富岡驛に坂本康幸、平山留次の諸店あり相馬雜原町に到りて志賀嘉吉、興谷與次郎、齋藤商店、門馬木炭部等を主とす

尙平町の驛前に狩谷岡平氏在り氏は新潟縣の出身にして始め海岸線木炭が需用地に知られざりし砌旺んに宣傳に努め絕對的に丸俵を鼓吹し深川區星谷商店の販賣木炭の殆んど大部分は同氏の供給にかゝるの勢ひを示せることありて木炭界に歷史を有する人なるが、今は土地販賣にのみ意を注ぎ移出を營まざるが如きも斯界の人として特に錄し置かん。

田村郡

福島縣に於ける黑炭角俵の生產移出地とし濱三郡と相並んで消費市場に認められしものに田村郡ありて、磐越東線小野新町、神俣、夏井の三驛を主とし稱して田村物と云ひ、田村木炭同業組合の中

薪炭木材輸出

電化工業用各種木炭購入

福島縣石城郡植田驛前

木炭輸出購入〈〇 渡邊重三郎商店

電話十番電略(ワ)又ハ(ワタ)

濱三郡產改良角俵

福島縣石城郡平町

木炭生產輸出販賣 大里金丸商店

電話一二三番 電略(ヲサト)

振替口座 仙臺四三八一番

常磐線木戸驛

大竹式改良 高原甚藏

誠實大方の需に應ず

常磐線富岡驛前

木炭輸出 問屋 坂本康幸

電信略號（サカ）

福島縣双葉郡富岡町

木炭製造輸出販賣 双葉木炭株式會社

社長 早川清久

福島縣浪江驛前

木炭移出 佐藤商店薪炭部

電話二十四番 電略（サ）

店主 佐藤秀夫

吉

薪炭柏皮

福島縣原ノ町驛前

志賀嘉吉商店

電話一〇八振替東京二三二八番

木炭移出商

福島縣相馬郡原ノ町

門馬木炭部

電話三十一電略(サスヲ)
振替東京四四三六四番

店主門馬永松

常磐線原ノ町驛前

仲

糸繭薪炭商

齋守商店

電略(サモ)又ハ(サ)

改良土釜角俵移出

商標

木炭商

藤田頴孝商店

本店磐越東線神俣驛前
支店常磐線長塚驛前

櫃地たり製品は雜割角俵を主とし櫃割、櫃丸、雜丸、外に少量の椚丸をも産出す。

移出商　同方面に於ける主なる供給者は神俣驛の松永高之助、藤田顯孝商店、小野新町の櫃田一治、白石末松、大竹福次郎、大越万次郎、吉田今朝治の諸店、夏井驛に藥谷勇平、齋藤商店、岩塚幸治の諸店を數ふ。

縣南地方

白河町を中心に矢吹、須賀川方面を包擁し更に東白川郡棚倉町へ集散し、白棚線に據り次で本線に連續され消費市場へ供給さるゝ製品を稱して縣南とす卽ち縣南木炭同業組合地區内の產とす殊に矢吹は櫃大束の特產地として知られ樹質優秀せる薪を產出す、今其各主要移出驛に就いて數量と移出量を示さん。

白河驛

木炭年額百五十萬貫と少數の白炭と松炭を移出し產地は岩瀨郡に境せる西郷、小田川方面と栃木縣に隣接せる白坂、黑川方面の產此の驛に集散す一俵量目は櫃正味四貫目雜正味三貫五百目とし笹丸俵を以てせるも近時弗々角俵に改良されつゝあるの傾向なり、薪も相當量を示し年概算產額八十六萬二千八百貫に達せり

移出商　吉田勝三郎、澤野興之助、澁木啓次郎、松本卯之吉、和知角治、白岩さき、鳳船喜作、堀田康次郎、根本龜吉、山中善五郎、國井源助、星德三郎、吉田岩右衛門、遠藤伊重、池田德太郎、笹川穀、相澤彌三郎、五十嵐定藏、吉田宗助、松尾藤藏、鈴木茂平、高荻平彌、星金之助の諸店を數ふ。

矢吹驛

矢吹驛より移出する木炭は縣南木炭同業組合地區内中其優秀せる點に於て首位を占め野州本線櫃丸が木炭同業組合の施設宜しきを得て改良せられ市場に聲價を博するに至れるそれに比して毫も遜色なきまでに改良せられ一俵量目は縣南同業組合の定欵に準據し居れば白河驛移出木炭と同量なり年移出額二十萬貫を下らず又薪にありては年移出額束廻り三尺物二十萬束に達し質最も優良にして本場物の數を冠せり。

移出商　伊勢野健次、大木代吉、藤田由藏、菊地熊之助の諸店を主とす。

須賀川驛

須賀川驛移出の薪炭は近在里山より產するものは矢吹と同品種なるも羽鳥、湯木方面より產するも

のは原本大樹なるを以て品質の劣れるは數の免れざる所とす、木炭移出年額九十六萬貫、薪五萬束内外を移出す。

移出商　井上定吉、小林貞三、鈴木英一、新田源吉、大原茂助の諸店を數へ又須賀川を瓦る五里の地點なる石川町に深谷新之助商店あり。

白棚線棚倉驛

縣南木炭同業組合地區にして東白川郡産の集散地なり此の驛より移出さるゝ年額は黒炭七十七萬四千八百十六貫白炭十七萬八千七百貫、松炭五萬貫と稱せられ縣南地區中將來に嘱目さるゝ主産地にして石城郡界の國有林の如き今後に開發さるべき有望なる資源林なりと稱せらる、薪も一年四萬五千六百五十束の數量を示せり、包裝は莨丸俵を主とせしも近時角俵に改まりつゝあり否寧ろ縣南に於ける角俵の創始地と稱するも過言ならず今日にては角俵丸俵相半ばせる程度ならんか。

移出商　西森新之助、上田豐次郎、宗田幸次郎、渡邊松太郎、富澤敬盛、鈴木清治、宗田源太郎、鎌田德兵衛、菊地定吉、高宮清次郎、木村金太郎、宇津木甚作の諸店あり。

白棚線磐城金山驛より一ヶ年移出額木炭八十車内外を示し薪も壹萬四五千束の移出あり藤田清一、吉田勝三郎商店出張所、岡部薪炭部等此驛にて移出に從事せり。

新　炭　木　材

電話縣棚倉古町
上田豐次郎
電話十六番

白棚線棚倉驛前
上田出張所
電話四十六番

群馬縣桐生市高砂町
上田支店
店主　上田信次郎

製炭所
東白川郡高野村
專用軌道設備あり

薪炭輸出問屋
福島縣棚倉町城跡
宗田幸次郎
特長電話五十二番

薪炭輸出問屋
福島縣白河町
吉田勝三郎
電話二三五番
出張所　白棚線金山驛前

木炭製產移出

福島縣東白川郡笹原村川上

西森新之助商店

電略（ニシ）又ハ（ニ）

出張所 白棚線棚倉驛前（電話七一）

東京販賣部 市外尾久町上尾久七一八

西森爲次

商標

薪炭木材問屋 白岩商店

福島縣白河町仁井町八十二番地

電略（シ）又ハ（シライワ）

薪炭織糸商

福島縣須賀川町

小林貞藏

電略（コ）

薪炭製產移出

福島縣白河町

澤野豐之助

墨炭丸俵角俵各種

福島縣棚倉町
薪炭輸出 富澤敬盛
電話十番

福島縣須賀川町
薪炭輸出 井上定吉

福島縣矢吹驛前
薪炭輸出 菊地熊之助
電話(キク)又ハ(キ)

福島縣棚倉町
材木薪炭 渡邊松太郎
電話四十番

福島縣棚倉鐵砲町
薪炭商糸 鎌田德兵衛
電話五十七番

福島市萬世町
薪炭石炭 樋口彌忠次
電話四百五十七番

薪炭石炭問屋
高橋德次郎商店
福島市驛前

福島市中町三番地
薪炭石炭 山口芳藏
電話四五三番

福島市

福島市は縣の中樞首邑にして縣廳を初め各官衙學校の所在地たり、木炭消費量も年額壹千萬貫内外を示し供給地は縣内は伊達郡、信夫郡の產並に本線筋、磐越東線筋を主とし縣外は宮城縣白石、岩手縣盛岡、秋田縣横手、山形縣板谷、關根、天童方面より移入を受く、又近時北海道產の移入せらるゝありて取引方面は漸次他方面に延ぶ、同市薪炭商組としては兼業者を加へて二百餘店を示せり而して福島市を中心に伊達、信夫兩郡の生產地を併含し福島木炭同業組合の組織あり高橋德次郎氏組長に擧げらる、尙同市當業者は必ずしも土地販賣にのみ止まらずして同業組合地區内產等をして栃木縣佐野、茨城縣下館、群馬縣館林方面へ移出を營む

移出販賣商　高橋德次郎、樋口彌忠次、山口芳藏の諸店
薪炭問屋　渡邊久助、遊佐儀助、長谷川吉次、樋口曉、菅野三十郎の諸店

郡山市

福島市に亞ぐの都邑にして木炭消費量年額二百萬貫に達すと云ふ、薪炭問屋には佐藤常吉、阿部光

男、坪井榮作の諸店ありて、郡内産の外主として磐越東線、會津、白石方面より移入を仰ぎつゝあり

會津方面

福島縣の西部岩代に屬する方面は總稱して會津地方と稱し優良なる堅炭を産し東京市場を中心に各地に供給し聲價を認められつゝあり一面木炭の改善統一施設としても創めは會津を三分して猪苗代方面を中心に東部木炭同業組合若松市を中心として中部木炭同業組合、野澤を中心として西部木炭同業組合の組織せらるゝありしも、成績の甚だ振はざるものあるを機會に、縣當局は當業有識者の輿論を容れて三組合を併合し總括して會津木炭同業組合と稱し組織の更新を行つて著々業蹟を擧げつゝあり、量目は正味四貫詰込とし等級別檢査を行ひ稀に大俵叭十貫俵を出す部落あれど此種は主として茨城、埼玉の兩縣其他の中間に供給し東京市場にありては家庭小焚用に適する小俵四貫を歓迎するの狀なれば生産地にありても殆んど全産額の八割までは小俵に改められし傾向なり、左に之れより會津地方(磐越西線)の主要移出驛に就いて順次に概報すべし

上戸驛

年移出額四十八萬貫と稱せられ安積郡月形、中野、三代、福良の各村よりの製品は多く此の驛より移出さる、移出商としては村尾伊太郎、土屋藤吉、佐藤岩三郎商店出張所、佐治豐商店出張所の諸店あり、又福良村に到れば畑德次郎、武藤與吉の兩店を主とす

川桁驛

森林軌道の敷設ある吾妻山國有林より製出さるゝものにして同地は一年五百町歩づゝの輪伐法に依り向ふ壹百年繼續し得ると云ふ好望なる原料林地なり、此驛より移出さるゝ年額は三十五萬貫内外と稱せらる、移出商としては村尾伊太郎商店の出張所、渡邊甚太、村澤猪之吉、佐藤岩三郎商店出張所等を數ふ

猪苗代驛

吾妻山、磐梯山麓等を生産地とし年移出額二十萬貫に達し尚ほ薪の産出あり一年百五十束を産す、

移出商には桑間八次郎、良田義彰、本田辰次、阿部伊三郎の諸店あり

會津若松驛

消費地にして又一面移出地たり産地は南北會津郡にして田島町に集中するもの車馬に依つて搬出さる南會津郡は薪炭林豐富なれば將來野岩羽鐵道の開通をも見ば林源旺んに開發せられ、若松市の如きは必ず單なる消費都市となり新設さる産地驛より直接市場に供給せらるゝに至るべし、現に同市へは磐越東線産、野州産、北海道産等の移入を見年額千五百噸の多きを示せるの狀なり、移出は會津堅炭正味四貫物多く年額壹百萬貫内外なり、移出商には佐藤岩三郎商店出張所、長谷川藤次郎、岩原三次郎、佐治豐商店、岩原久吉、宍戸篤己商店等を主とす

喜多方驛

移出商の主なるものは長谷川德次、渡信タケ商店、松崎寅作、蓮沼喜八、石川庄吉の諸店、加納村に到りて長井寅次、二瓶義宗、佐川惣八の諸店あり、産地は大鹽、熱鹽山林を主とし正味四貫小俵の優品にして年移出額四十五萬貫内外なり

山都驛

從來は山都相川兩村一帶の林地より生産せられたれども年次伐り盡し交通不便なる深山に進まざれば能はざる傾向なるより此の地移出商には寧ろ他地方へ手を轉じつゝ山川淺吉氏の如き貝見川の舟楫に依り大沼郡長沼町方面に手を染め來れる形跡あり此の驛一ヶ年移出量は五十萬内外を往來し外に官行十二三萬貫を製出す、移出商には山川淺吉、唐橋吉市、物江惣三郎、佐藤三郎、佐藤久信、關口綠、高橋倉右衛門、五十嵐卓之丞、田中傳次郎、唐橋市郎、小澤善市、福原運送店木炭部等を數ふ

野澤驛

正味四貫小俵八割十貫叺入大俵二割の振合にて年移出額百二十萬貫を示せり、薪も年移出量四百車内外に達せんか、生産地は郡内西方、下谷、睦合、東松、後谷、芹越、山郷、尾野尻、群岡各村の産を主とせり、新潟縣に境せる飯豐山の如き無盡藏に近き密林なりと云へば産額の前途悲觀に及ばざるべしと、此地には東京市神田區佐久間川岸木炭問屋丸若商店の共同事業地ありて特に優品を製

品質精撰會津本場堅炭

會津木炭移出商

登錄商標

佐藤岩三郎商店

本店　福島縣北會津郡港村字原四二〇
出張所　會津若松市榮町四丁目四〇〇
電話三百三十九番

販賣所　東京市神田區佐久間河岸二十一號地
薪炭問屋　佐治商店
電話下谷五五四五番

公認　會津若松驛前
渡邊運送店
薪炭木材誠實取扱　電話三九振替東京六五七八

公認　會津若松驛前
服部運送店
電話一一八振替東京三四八四六仙臺二八五八
薪炭木材確實迅速

會津薪炭移出商
福島縣猪苗代驛前
阿部伊三郎
電略（ア）又ハ（アヘ）

會津木炭製造移出
福島縣耶麻郡上戸驛前
土屋藤吉
電略（ツチヤ）又ハ（ツ）

會津改良木炭移出
福島縣耶麻郡關都
村澤猪吉
電略（ムラ）又ハ（イ）

會津木炭問屋
福島縣猪苗代町
本田辰次
電略（ホン）又ハ（ホ）

會津木炭移出
福島縣耶麻郡上戸驛前
村尾伊太郎
電略（ムラ）又ハ（ム）

薪炭輸出問屋
福島縣猪苗代町
桑間八次郎
桝屋號 電話二十六番
電略（クワマ）

薪炭輸出商
福島縣猪苗代町
㊀ 良田義彰
電略（マルイチ）

會津木炭移出
會津喜多方町東町
㋡ 渡信タケ
電略（ワタ）又ハ（タケ）

會津木炭移出
會津喜多方町仲町
㊇ 長谷川德次
電略（マルトク）

木炭問屋 土木建築請負專業
福島縣耶麻郡松山村
㊀ 石川庄吉
電略（イシ）又ハ（イ）

會津木炭問屋
若松市中川原町
「長尾爲治
電話 四六五番

㊄ 木炭輸出
福島縣耶麻郡米幡村
山川淺吉
振替東京 三九四〇三番

桝大上、桝小丸、別撰
若松市博勞町五番地
佐治豐商店
電話百六十電略（サ）

會津木炭輸出商
若松市博勞町四丁目
岩原三次郎
電話七二〇 振替東京二五二六九

會津野澤町移出商

會津野澤町 田中嘉茂八 振替東京三二五九七

會津野澤町 伊藤作次 電話長四十五番

會津野澤町 植木屋商店 店主 岡崎文志

會津野澤町 野口市郎 電略（ノクチ）

會津野澤町 鈴木荒三郎 電略（ヤマキ）

會津野澤町 大沼彦輔 電略（ヒコ）

會津野澤町 齋藤玄壽 電話五十五番

會津野澤町 大沼仙吉 電略（イゼヤ）

出す

徳澤驛

耶麻那群岡村に屬し新潟縣東蒲原郡と隣し軌道にて進めば奥川村に達す同村の奥地は薪炭林に富み樹種亦優良なり、地理の關係より津川町の當業者が此地に出張所を有し旺んに移出を營まる、一面營林署の官行製炭所ありて此驛より移出する數量年額百七十萬貫と稱せらる其過半は官行なりと云ふ

北海道

北海道の面積は六千百五十五方里にして日本全土の四分の一を占め林業地面積六百萬町歩を有しその蓄積二十五億萬石を算し千古斧鉞の入らざる森林に富むを以て薪炭供給地として樞要最適の地にあり最近一ヶ年間の薪炭材伐採量は正に一千二百二十六萬石を超えたり併し本道の製炭事業は開拓の初期原木豐富にして而も老大木を原料として舊慣を傳統的に繼承し來りしが近時同業組合も各地に設立せられ木炭の品位統一荷造量目の正確を期すべく檢査を施行し居れば製品は隔世の感あるほ

ど改善せられ大正十年には二十六萬俵十一年には八十五萬俵十二年には八十三萬俵此金額百四十萬圓を移出するに至る而して大正十四年八月青函連絡貨車航送船の開通により一日優に八百噸の輸送能力ある故に今後道外移出は急激の進展を見るは明なり。

函館市

函館は我國最古の開港場の一にして海陸交通の要衝の地にして市況殷盛なり函館薪炭同業組合の定款によれば製品を松竹梅櫻柳の五等に區別し量目は十貫七貫五貫の三種なれども大體は十貫莚俵多し最近東北産にならひ簀子製五貫角俵み出すものを生じたり製炭林は始んどなく全部道内より移入して之を市内にて販賣し一部は内地へ移出し居れり業者は市内卸小賣者大部分を占め内地移出事業者は至つて少し。

北海薪炭合名會社

北海薪炭合名會社は函館市若松町五十番地にあり代表社員齋藤忠氏は年齢漸く而立を超えしのみの奮闘的商機に敏なる人物にして道内業者中錚々たるものなり日高林業株式會社一手販賣店にして新

製炭移出 函 鎌川忠吉商店
函館市豐川町五拾五番地
電話二七三五番 賣炭所 眞砂町二番地
製炭所 十勝國足寄村

薪炭委托賣買 旭印 函館薪炭問屋共同販賣所
函館市若松町三十一番地
電話二二七七番 電略(キヨ)又ハ(キ)

冠御料牧場五千四百町歩の内三千三百町歩の拂下げを受け理想的設備の下に一ヶ月二十萬貫の大量を生産し楓炭を主とし事業地は海岸に面し居る故直ちに青森東京横濱等へ一ヶ月汽船便により二千噸は輸送し得らる今年一道六縣の共進會には楓炭を出品して一等賞を得。

北海薪炭合名會社は青森弘前及東京駒込電停前の三ヶ所へ出張所を設け大正九年以來大量の内地移出をなしつゝありタドンも粉碎機十臺乾燥場六十坪一日の生産能力一萬個といふ大規模にて製造し居れり

此の外移出商は村岡倉吉氏を社長とせる函館林産株式會社、大谷末吉、旭印函館薪炭問屋共同販賣所、池田作次郎宮崎礎氏などあり。

札幌市

札幌市は道廳所在地にして人口十四萬を有する區劃整然たる大都市にして從つて大消費都市なり。

移出業者　比治傳介、窪田榮勇、小間彦松、高野喜一郎、若山三次氏などなり。

小樽市

小樽市は海陸交通全便にして道中最も早く開けたる都市にして人口十三萬を抱擁し市況殷盛を極む

小樽薪炭商組合は大正十年成立して今日に至りしものにて年額七十萬俵乃至百萬俵位の集散あり此三割以上は内地へ移出され殊に漁獵期には道海に盛んに移出さる。

北海道薪炭株式會社

明治三十一年二月の創立にして角澤善三氏專務たり角澤氏は創立當時より會社發展の中心人物として今日に至りしものにて果斷機敏に木炭界を馳驅し社運日埒しに隆盛に赴き今や十貫俵二十萬内外を取扱ひ其二割强を内地へ移出し居れり又註文によつては五貫角俵を作るとの事なり。

移出商　本江元吉、巴薪炭商會、清水金太郎、新谷與吉、波多孝太郎、東野宇之、牧野由次郎氏などあり。

旭川市

土地肥沃なる石狩平野の中心にあり人口七萬を有するのみなれども師團所在地たると共に豐富なる農産物の集散地なれば道内中最も發展の度著しく且つ寒氣最も酷烈なる所なれば大體に於て消費市場なり移出業者としては紙谷商店長岡德治氏鈴木商店小柳商店等の數氏あるのみなり。

小樽市住ノ江町二丁目七番地

薪炭卸商 岡本江元吉商店

電話一一一七番
振替小樽一九二六番

小樽市開運町四丁目八番地

株式會社 巴 薪炭商會

電話八八八番

木炭移出商
小樽市開運町五丁目拾九番地
岡清水金太郎
電略(シミ)又ハ(キ)

製炭移出
北海道高島驛
佐藤德太郎
電略(サト)又ハ(サ)

製炭移出 ㊗ 杉田歳雄商店
北海道釧路國淦別榮町
振替小樽九九貳五番
電略(〇セ)又ハ(セ)

野付牛町

北見平野の中心地にして宗谷網走池田の三線の交叉する所にして交通至便殊に木炭生産地としては比較的新開地なれども先進地が濫伐の結果原料林缺乏の今日北海道木炭の中心地たる要素を具備し居り燃炭は釧路池田線などが優良なれども稍は野付牛を中心とせる北見が優秀なり。

三共商會

和歌山縣出身にして大正八年大志を抱きて北海道に渡り道内各地の商況を視察研究の後、慧眼なる氏の野付牛が地の利を得て前途有望なるを悟りこゝに開店主として農産物を商ひ時恰も戰後好況の潤に乘じて一擧商陣を擴張し今日に至りしものにて、木炭内地移出者としては先驅者の一人にして年五萬俵内外を東京埼玉千葉地方へ移出し居れり、現今美幌、調子府に支店を設け盛んに活躍をなしつゝあり氏は年齢漸く前立を越えしのみの新進氣鋭の士なれば今後の發展期して俟つべきなり。

早來附近

薪炭移出問屋

北海道北見國野付牛町停車場通り

亀井商店

店主 亀井林右衛門

電話二一一四番

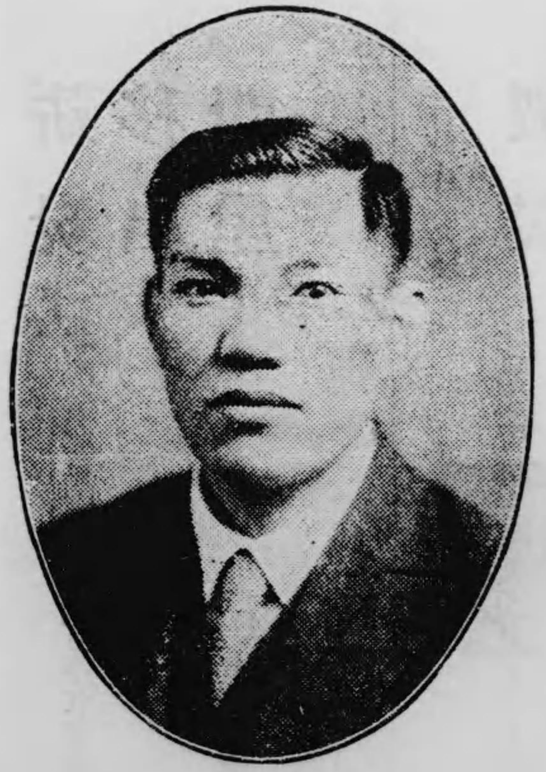
製炭移出

北見國野付牛町大通東十二丁目六〇番地

高崎增吉商店

電略(〇タ)又ハ(タ)

室蘭線早來附近は北海木炭の先進地にして品質に於ても數量に於ても又五貫角俵の移出に於ても先鞭を附けし處にして柏丸にあつては野州物と駢駕し楓類なども樫よりも硬度稍々低き位の良品なり大正十四年度の鐵道貨物收入金十五萬七千圓中十萬圓は木炭運賃なるを見ても如何に製炭が旺盛なるを知るべく併し最近に於ては一般に炭材缺乏を告げ多少生產數量減少せる傾向を示せり。



藤田龍藏商店

藤田氏は越中富山の出身にして明治三十六年北海道に渡り炭界に入りて二十有餘年奮鬪努力今日の地位と富とを獲たゝで初め早來に居を定め製炭業に着手せられしが苦小牧が海陸交通至便にして將來の活躍上有利なるに着眼せられて苦小牧に

製炭
運送業 ㊗

北海道勇拂郡安平村字早來

志賀智商店

電話自宅十二番、營業所一番
振替口座 小樽四四八四番

北海
木炭 五貫角俵 ㊥

製炭移出

山下六三郎

北海道室蘭線早來驛前
電話二十 電略(〇キ)又ハ(ヤ)

木炭卸商
北海道室蘭線早來
唐澤要藏商店
電略（カラ）又ハ（カ）

木炭移出
北海道室蘭本線早來
大塲敏雄商店

北海木炭製造移出
室蘭線早來驛
金谷豐槌商店
電話六番

此の外、三好製炭所、平野仙松、奥爲男、五十嵐惣太郎、古川幸次郎、安藤嗣與司、八木芳造、大滝大三郎、永谷松松、等は重なる移出業者なり。

輸送されしものにて窯五十餘を有し一ヶ年生産量實に十萬餘札幌、秋田に支店、東京に出張所を札幌に有し一、二、三公設販賣所を設けるなど其發展活躍目覽しきものなり昨年設立したる勝振日高木炭組合代議員會に於て滿場一致組合長に選任せらる今後の北海木炭發展上氏に負ふ所大なりといふべし氏は五貫角俵も製造移出し居れり。

室蘭港

室蘭市は室蘭線の開通に次で二十六年室蘭函館青森間の定期開始により急速の膨脹を遂げ現今人口五萬餘を有する都市にして海陸聯絡設備完全せられたるを以て從來木炭移出地たる室蘭沿線の木炭は悉くこゝに集り内地へ移出せられしが青函貨車航送船の開通により多少の影響は免れざる所なり

縫部商店

店主善太郎氏は同地移出業者中傑出せる問屋にして大正三年母懸町に開業し鵜川村に於て製炭合資會社を設立し、漸次營業を擴張して大正八年現在の海岸町に移轉し日本製鋼所王子製紙會社及各官衙に納炭し居りしが大正十年以來道外移出に努力され炭質の精選と量目の正確と相俟つて次第に地

製炭移出
室蘭市港町二十四番地
杉本慶太郎商店
電話六十二番

製炭移出
室蘭市濱町
加賀屋西商店

盤を固め年五萬俵内外内地へ移出し居たり同氏は町會議員、市會議員等の公職に就かれ現に室蘭商業會議所議員として實業界に重きをなし居れり。

熊本縣

熊本縣林野の推定面積は國有林野六萬八千町歩公有林野十七萬二千町歩私有林野三十三萬町歩合計五十七萬町歩にして本縣全地積七十四町歩に對し約七割六分を占有す從て之が開發は獨り林業經濟に關係あるのみならず諸般の事業の進歩發達に關係尠しとせず、私有林の大部分は雜木幼齡林乃至薪炭林にして普通十年乃至十五年を以て輪伐す近時薪炭林欠乏及炭價不振のため薪炭の生産稍々減少せり。

球磨木炭同業組合は球磨郡一圓を以て區域とし明治四十四年十二月二日設立認可され今日に至りしものにて原料林豐富なる上に地の利を占め中央に鐵路敷かれ居るため年年生産量を増加し十三年度に於ては百四十萬俵一千百二十一萬貫を出せり、此の中六分は半白二分は紀州式一分は白炭の比にして俵裝は悉く壹瓩丸俵なれども近來黑炭を角俵として移出するに至れり。

各式木炭問屋 ㊦ 津呂佳次郎商店
熊本縣人吉驛前東道
取引銀行安田銀行人吉支店
電話 百二十八番

〈西木炭雜貨商 西彌次郎商店
肥後球磨郡一勝地那良口驛前
振替福岡六九九〇番
電略(ニシ)又ハ(ニ)

木炭
材木商
合名會社 淺田商會出張所
熊本縣球磨郡人吉町
長電話一五七番

木炭
問屋
竹市與一郎
熊本縣球磨郡矢嶽驛前
取引銀行安田銀行人吉支店

木炭問屋
桝石隆介商店
九州線人吉驛前

樫材木炭商
四元喜太郎
肥後人吉驛前
長電話二〇番

鹿兒島縣

縣下に於ける同業者を以て組織せる鹿兒島木炭同業組合は大正八年の設立にして組合員總計四千五百人を算し年産額一千五百萬貫に及び全國各府縣中第四位の池位を占め此のうち約七割は縣外に移出さる之を大別すれば半白五黑炭二・五白炭二・五の比にして白炭は九貫半白は八貫黑炭は六貫とし俵裝は壹の丸俵にして近時四貫目角俵を作り家庭小焚用として關東市場へ現るゝに至れり。

勢力絕倫なる小倉東氏

鹿兒島市易居町なる小倉商店は大正七年の創業にして年移出量は八十萬俵内外にして種子島の年産額六十五萬俵中四十萬俵は小倉商店にて取扱ひ之が輸送には五十噸四艘を以て當り直ちに岸壁より貨車積みし得らる店主東氏は明治二十二年八月生れの弱冠創業八年にして今日の成功を獲たるは大に首肯さるゝ數々あり氏の起床は午前三時にして三十餘人の仲仕を指圖して五時には早くも操業にかゝり五時より遲刻五分以上のものはその日を缺勤せしむる規約の下に毎朝四時より貨車積みの采配を振り疲るゝを知らずといふ實に精力の絕倫なる驚くに耐えたり日下同業組合代議員たるも其他

製炭
移出
鹿兒島市小川町五番地
鹿兒島木炭株式會社
電話一四一〇番
電略（カモ）又ハ（カ）
振替福岡一六五二八番

鹿兒島市小川町壹壹九番地
木炭問屋 梅谷正熊商店

鹿兒島線川内線各驛積
壹箇月輸送高六萬俵

木炭問屋　小倉本店

鹿兒島市易居町

電話特長　一三一四番
九七七番

支店　種子島西之表
種子島濱津脇

出張所　東京新宿驛前
川邊郡加世田町

木炭問屋　西村岩太郎

鹿兒島市堀江町

電話二一〇四番

木炭問屋　林治右衛門

鹿兒島驛前

電話一一〇三番

木炭問屋

鹿兒島市潮見町四番地

榮田榮造

電話特長三一八番

木炭移出

鹿兒島市堀江町廣馬場通り

中村商店

電話二一一一番

名譽職及銀行等の重役の推薦をうくるも辭じて受けざるが如きは氏の抱負の反面を物語るものにて今年鹿兒島市内多額納稅者中第十二位にあり九州木炭界の生める成功者といふべし。

宮崎縣

宮崎縣は日向國一國にて東南の二面に大海を控へて澎湃たる怒濤を浴び北西は豐肥隅の三州に境して山光水色到る處秀麗雄渾を極め殊に天孫降臨の地として名蹟舊址處々に散在し豐富の史料地である。木縣の山林原野の見込面積は約六十三萬六千餘町歩にして縣總面積に比し約八割一分强を占め一戸當り六町歩餘となり全國有數の官林國にして最近林產額一ヶ年二千萬圓内外に達しその内木炭は年額二千萬貫餘にして價格約五百萬圓に及び縣外移出其七割を占む。

縣下製炭材の狀況を觀るに歐洲大戰の影響をうけて經濟界の好況に伴ひ木炭の生產頗る著しく增加し從て原料林は減少しつゝあれども未だ五ヶ瀨川、一の瀨の上流並に大淀川の流域には今尙樹齡高く製炭材としては老大に過ぐるもの少なからず製品は一般に白炭、黑炭、鍛冶炭の三種に大別せられて白炭は炭質堅密で火力强く移出木炭の大部分を占め各地に於て聲價を認めらる黑炭は燃燒時間の長短に依つて普通黑炭と半白炭とに分ち半白炭は長く煉らしをかけたるものにて炭質硬く火付は

普通黒炭に比すれば稍々遅けれども火持永きを以て白炭に次で需要が多しこれ等木炭の主要移出先きは大阪の八百十二萬貫を最多とし京都東京兵庫といふ順序なるが之を生産地によつて上日向物下日向物とに區別さる上日向物とは兒湯、東臼杵、西臼杵郡産を云ひ下日向物とは宮崎、東諸縣、北諸縣、西諸縣、南那珂郡産を云ひ下日向物の原料林は大材多きため上日向物に比して下日向物は荒物多く且つ上等品の生産頭も上日向に比して少く從つて價格も概して下位にあり。

次に製材は始んど縣内に於て消費するに過ぎざるも年産額五千萬貫に達し何れも本縣重要産物の一なり。

後口楠松商店

茂氏

後口氏は和歌山縣出身にして明治四十四年人吉にて創業せしが大正十一年本線の開通と共に杉安が前途洋々たるを認め移居して鋭意努力今日に至りしものにて丸九印の日向米良山

宮崎線 小 小野滿商店木炭部

飯野驛 通 小野滿運送店

店主 小野滿吉次郎

製炭 移出

日向國宮崎郡清武町

谷口善吉商店

電略(タニ)

製炭
移出 ㊂ 宮崎林業株式會社
宮崎縣宮崎市上野町
電話 長一〇番
二六六番
六六六番

木炭仕入部 九州宮崎線妻驛前
岩本出張所

木炭問屋 ㊤ 米良產木炭製造販賣
玉置杉安支店
宮崎縣杉安驛前
振替福岡六九五四番

宮崎縣兒湯郡妻町
木炭問屋 緒方商會
電話六番

製炭材木
櫓木齒板商
車板製材商
樫材一式
森川芳郎
宮崎縣飯野驛前

宮崎縣妻町
木炭問屋 大木虎之助
支店杉安驛前

木炭木材輸出商
宮崎縣杉安驛前
今村久太商店

木材木炭商

商標 ㊀

九州宮崎線杉安驛前

仁科宇平商店

木炭問屋
木炭爲替
倉庫業

合資會社

日州產業商會

本店　宮崎市橘通六丁目　代表社員　中原優　電話一八〇番

倉庫部　荷爲替其他木炭に對し金融並委託販賣
日向妻町　主任　井原靜平
倉庫杉安驛及妻驛前　電話妻三九番

木炭商

宮崎縣兒湯郡杉安驛前

濱田勘二商店

電略（ハマ）又ハ（ハ）

三井物産會社直輸入

印 溫州木炭

關西一手販賣元

大阪市西區西道頓堀通五丁目

木炭問屋

日支木炭株式會社

電話櫻川一一六一番

內地物荷受歡迎！

産、日向式、紀州式、木炭の聲價は日一日と高められたり後日氏は多年の信用や相互の溫情によつて爲替などを附することなく永久に圓滿に取引し品種の選別や斤量の絶對的嚴重を勵行してゐる故苦情などは起らないとの事である品評會や共進會等に出品して優等賞を授與されしこと枚擧に遑あらず後に氏は公共事業にも功績少からず米良は縣の寶庫とも云ふべき處なるが交通不便のためその開拓を見るに至らざりしを慨き自ら日向軌道株式會社を發起して杉安より十四哩五分を敷設したるは産業開發上の偉勳と云ふべきなり今や氏は自ら山に入り製炭に沒頭し販賣等の業務は令息茂氏擔當して鋭意奮鬪し居れり。

和歌山縣

◎總說　和歌山縣は本州の中央より稍々西部に偏して紀伊半島の西南兩面を領し本州島の最南端を占む、疆域は北方大阪府に界し東は奈良縣に隣し東南は三重縣に接す、地勢は海岸屈曲して奇崖多く潮岬以東は熊野灘と稱し特に航海業者の危險を感ずる處にして南北に長く東西に短し、紀伊山系は西方より來つて東方に馳せ其脈は千分萬岐して平原に乏し、如斯なるが故に縣管下全面積は三百方里と稱すれども耕地は僅かに四萬七千町歩を算するに過ぎざるなり、他は概ね山林なるを以て往古より林産物の豐富なる點は多く其比を見ざる所なり、從つて我木炭にありても産額の點に於て將た品質の點に於て全國主要生産地たり、長俵と云へば熊野木炭を指す程にして其好良無比なる實に全國中其右に出づるものなし、産額にありても年白炭約六百萬貫、黑炭約四百萬貫を産す。

◎製炭の沿革　和歌山縣に於ける製炭業は正德年間紀伊藩に於て殖産振興の主旨により之が奬勵に努め、炭山御仕入方と稱するものを設け和歌山、大和、伊勢の各地に於て薪炭林を買上げ業を起せるに因る、其後藩の直接經營に移り隨時仕入を爲し來れるも、廢藩置縣と共に漸次民業に移れり。

熊野炭の燒方に二種あり、土佐燒及備長燒と云ふ、土佐燒は其の名の如く往古土佐より傳習せし者にて備長燒は元祿年間西牟婁郡田邊の人備後屋長右衛門の創始に係れるものにして、爾來此の方法は歲月を逐うて熾んとなり漸次各地に普及せるものなり。

◎製炭の副業　醋酸石灰は製炭唯一の副業にして明治廿一年頃、日高郡南部町の人濱口氏が其工場に於て木材を乾餾し液汁を採取するを見て其方法を炭窯に應用せるに起因せり、爾來木炭の生産地たる日高、西牟婁、東牟婁の三郡に於て之れが製造漸次旺盛を極め一時は年額一千貫内外を出せしが近時米國産の壓迫により生産不引合を來し殆んど製造するものなきに至れり。

日高郡

日高郡に於ける木炭製造の由來は幾百年の以前に屬せるため今之を審かにするを得ざれども、南部川切日川筋の村落及び日高川流域に沿へる中央部地方より旺んに產出を始めたるに由來し今日尙益々產額の增加を見るの傾向にあり。

而して明治四十年に至るや日高郡を一丸とする日高郡木炭同業組合の設立を見るに至り更に明治四十四年には木醋酸同業組合との合併を遂げ、組合の基礎亦鞏固となり同郡木炭業の前途に光明を與へたり。

備考　木炭は正味四貫物一分、三貫物四分、二貫五百匁物五分の割合なり。

三前松一郎氏の業務狀況

一手にて年移出額二十五萬俵の木炭を市場に供給する人は業界稀れに見る處にして、世人が口を揃へて三前氏を稱して我木炭界の權威なりと謂ふも敢て過言に非ざるべし、從つて氏の一擧手一投足は直ちに市場に影響を與ふる勢力を有す。而して同店木炭製造の由來は彼の萬葉集に歌人繁里の名を止める熊代家の經營に係る事蹟を、初代伊平氏が安政二年に襲承して連綿今日に至れるものなり。

同店の製品は內外博覽會其他共進會に於て、一等賞金牌並に金盃を受くること前後五回に及べり、爲めに四近同業中其榮譽を謳はざるなく、市場亦氏の製品を迎ふるもの日に多きを加ふるに至る。

西牟婁郡

往古より木炭製造を開始せる土地なるも年代は知る由もなしと雖も熊野木炭の聲名は各市場に喧傳せられ、それが移出の紀元にありても縣下最古に屬せるは事實なるが如し、今郡內に於ける現今の薪炭林面積を繹ぬるに三萬七千八百餘町歩、製造窯數一千を超へ產額は縣下第一位を占め居れり、品種は備長、丸備、樫備、備一、大丸、丸淺、上淺、中淺の八種に區分されあるも當業各自に於て如上各種の外に名稱を附せるものあれば、品種は多種多樣に岐れ居れりと謂ふべし。

同郡に於ける同業組合は明治四十二年に創設され、爾來專ら製品の改善統一に力を注ぎ、生產地及移出市場に於て嚴重なる檢査を勵行しつゝあるを以て近時著しく長足の進步を見るに至れり而して現時行はるゝ量目は正味二貫五百匁を小俵とし正味四貫匁を大俵とせり仕向地は大阪、神戸、兵庫京都、奈良、東京の各市場に亘り全部海運に依りて移出さる。

○田邊町

往時は安藤氏の居邑に屬し現今は郡役所中學校女學校等ありて殷賑を極めつゝあり、

されど我木炭の此地に集中するは至つて微々たるものにて同港を經由して移量する數量は年額十萬俵を出でず而して仕向地は殆んど大阪市場なり。

○新庄村　同地は田邊港を凌駕するに足るべき良港を有せるのみならず古來より木炭の產地として其名を知られ仕向地は主として東京にして一ヶ年約二十五萬俵を移出す、同地には有力なる荷主多し。

○鮎川村　田邊港の北部に位し山岳重疊たる地域にして木炭の生產高に於ては決して新庄村に勝るとも劣ることなく又副業たる醋酸石灰の製造に至りては郡下を通じて模範とせられ就中太田六右衛門氏の如きは權威者を以て目せらる。因みに鮎山村よりの仕向地は東京市場が九分を占め居れり

○日置村　各林地に於ける製炭事業は舊藩時代より旺盛にして現今年產額拾萬俵を超ゆるも小廻船の直接仕入を爲すもの多きため、正確の統計を示す能はず仕向地は東京、大阪の兩市場なり。

○周參見町　同町は安宅峠を隔つて日置村に隣接し木炭の產額年八萬俵内外に達せり、之が仕向地は東京、大阪を主なるものとす。

東牟婁郡

東牟婁郡より產する木炭の沿革に就ては其詳細を知るに由なしと雖も其職工は殆んど土產人に存せずして概して西牟婁郡(田邊附近)日高部(東南部)の住人たるに徵すれば其起源を前記二郡の何れよりか傳來せしものなるべく其製造方法及規模に就ては古より更に變革を認めず唯搬出の方法に至つては牛馬車、トロツク、ヤエン等漸時進步の利器に依るものあるを見る而して維新以前に於ける經營の組織は紀州藩の事業に屬し尙高池町現在事務所の位置に御仕入方と稱する藩の獨占出資問屋の本店を爲し川奧三ヶ所は之れが出張所を設け其外川奧沿道須要の地の有力者各壹人若くは二人に炭株と稱して原料林の買入製炭に關する獨占的營業權を附與し民衆をして自用に薪炭林の買入製炭をなすことを禁止し以て古座川一圓の木炭營業獨占の保護を圖りたり爾後廢藩置縣に伴ひ前述の藩の營業權を今の高池町雜長商店の代表者佐藤得四郎氏の先代に於て繼承し前記の組織に多少の動搖ゃ來たしたるも尙獨占問屋として經營數年に渉り明治十七八年頃より一般の自由營業に歸せり。

同郡にては品質、俵裝、量目の統一を期する目的を以て去る明治四十三年古座川木炭同業組合の組織を見るに至り創設以來役員に人を得て組合の運用宜しきに適ひ居るため事蹟日に月に揚り組合員の結束統一の鞏固なるは眞に誇とするに足るべし、今や主要集散地なる古座、高池の兩町並に西向村に檢査所を設けて製品の嚴重なる檢査を勵行しつゝありて量目の正確と品質の向上を見たり。

而して同郡木炭の年産額は約六十萬俵にして之を細別すれば古座川筋二十萬俵、熊野川筋三十萬俵其他十萬俵の割合に當れり。

量目は四貫匁と二貫五百目の二樣に分れて居るも下淺に限り三貫五百目とす、之れが仕向地は東京九割を占め名古屋四分大阪三分其他地方三分の比なるが如し。

○高池町　古座川の咽喉に位する木炭木材の集散地にして古座町に連續す、戸數四百戸に過ぎざるも豪商軒を連ね山産物に對する投資家尠からざるを以て百貨常に輻輳し河畔は荷役に賑ひ居り市況の旺盛活潑なるを窺ふを得べし。

○古座町　高池町と相隣接し戸數六百戸を有し其位置古座川河口に面せるが故に汽船便に依るものは概ね此地より乘降又は積卸するを例とせり、之等の關係に依りて商業は一般的と觀るときは高池町を凌駕するものゝ如し、仕向地は主として東京市場なり。

○西向村　同村は古座町高池町の對岸に當り木炭集散地にして古座川木炭同業組合の檢査所あり製材事業の旺んなることは管内屈指の土地柄に屬せり、土地木炭集散の狀況は對岸に比し何等の差異なきも數量は多少少なく主として東京へ移出し居れり。

○田原村　舊藩時代に此地は仕入方を置かれし處にして熊野木炭に就て因緣を有する地なり、今後交通の便開くると共に有望地なるべし。

○下里村　古座町を距る二里餘の街道筋に當り交通さまで不便ならず、而して木炭の製出に就ては古き歴史を有すれども今は農業の副業として從事するに過ぎず從て産額も年六七萬内外を算するに過ぎず仕向地は東京市場九分他を一分と見れば大差なからん。

新宮町

東牟婁郡新宮町は和歌山市に亞げる市街にして水野氏一萬五千石の舊城邑たり、勝浦より輕便鐵道の便あり木材木炭の産地として夙に其名を知らる、而して市街の位置は熊野川の流末に當れるを以て此の地に集散する木炭は單に縣内品のみに止まらずして三重、奈良の兩縣をも含めり、故に集散木炭の數量は一ヶ年を通じて約三十萬俵に達し、古座川筋を凌駕すること實に拾萬俵の多きに上れり。

如斯屈指の木炭主要集散地にして製品改善と共に市場に聲價を發揚せしむべき早急に迫り居るも今は重要産組合法に代ふるに睦組織の組合ありて同業者の統一親睦のもとに製品の改善の實も近時漸く揚り業者の結束も亦堅固なり。

木炭問屋 濱田清治

木炭移出 宇井善九郎 電話五一二番

木炭商 榎本正太郎 電略（エモト）

木材木炭 杉本喜代松 電話百十七番

米穀山物 津田長左衛門 電話三百番

木炭商 谷口米作 電略（タニ）

米穀山物 長島竹松 電話三四六番

木材木炭 小山支店 電話百六十九番

木炭商 榎本保一 電略（ヱモ）又ハ（エモ）

木炭移出 中西定吉 電略（ナカサ）

木炭商 松本芳松 電略（マツ）

木炭商 生熊龜次郎 電略（イクマ）

木炭商 花本梅吉 電略（ウメ）

木炭商 中川安次郎 電略（ナカヤス）

木炭商 桂五助 電略（カツラ）

木炭商 山下彦藏 電略（ヒコ）

木炭商 角萬之助 電略（マルカ）

木炭商 原啓祐

木炭商 尾崎順造

木炭商 中森歌吉

木炭商 早山宇市郎

木炭商 泉喜藏

木炭商 宇井政吉

木炭商 永井豊太郎

木炭木材

和歌山縣西牟婁郡周參見町

周參明治

然るに今年一月愈々重要物産組合法による法人組合組織の議出で略々纏りたれば近く設立の運びとなるべく、やがては東牟婁郡を一丸としたる組合となる豫定なりと。別項に新宮木炭移出同業組合員の名を掲ぐ。

◉熊野川筋の木炭商浦木清十郎氏

熊野川筋に於ける木炭王として夙に其聲名を謳はれつゝある浦木清十郎氏には新宮町の對岸なる三重縣御船村に支店を設置し先代より引繼き店基を擴張し居れり、同家の家憲として他より生材を仰ぎて製炭することは絶對に行はず、故に移出の木炭は全部所有山林に依るものなれば製品の劃一なるは勿論一朝市價の變動暴落に遭遇すと雖も毫も損手を招くことなく堅實此上もなきこととなり。而して先代在世の當時にあつては絶對的積極方針に出で產額の增加に努めたりと云ふも、近時職工賃銀の昂騰甚しきより之を動機として消極的方針に改め數量の大よりも品質の改善に重きを置けり、故に登錄せる『楕圓形浦木』の商標は益々聲價を擅すると共に、氏の明敏は商機を誤ることなく、品質亦優良なるを以て製品は常に最高値に取引されつゝあり。

日本醋酸製造株式會社原料購入代理店
和歌山縣西牟婁郡鮎川村
木炭、米穀、醋酸石灰、酒、山產物
㊅ 商店 太田六右衛門
電略(〇六)振替大坂一九〇三四番

和歌山縣西牟婁郡新庄村
商號 今久
今ア 木炭問屋 眞砂久次郎
電略(イマキウ)又ハ(イマ)

木炭
肥料
米穀

和歌山縣西牟婁郡新庄村

紀州物産株式會社

和歌山縣西牟婁郡新庄村
木炭問屋

榎本傳次

和歌山縣西牟婁郡鮎川村
木炭
醋酸
石灰
米穀
雜穀
問屋

松本高次郎

電話〇八〇

木材
木炭問屋

鈴木支店

和歌山縣東牟婁郡西向

本店 紀伊湖岬

電話六四番乙

木材木炭
肥料商

玉置伊兵衛

和歌山縣東牟婁郡下里村高芝

電話長五番

宮崎縣宮崎町廣瀬村下田島

木材木炭

玉置支店

和歌山縣東牟婁郡高池町
合資會社 雜長商店
木炭問屋 ㊇
電話古座六番
電信略號（サイ）

和歌山縣東牟婁郡古座町
木炭木材問屋 富田又市
電話二八番
電略（ヌ一）又ハ（ヌ）

和歌山縣東牟婁郡古座町
製炭移出 佐藤嘉市
電話二三番

和歌山縣東牟婁郡田原村
木炭問屋 荒木四郎吉
電略（アラシ）

和歌山縣東牟婁郡古座町
木炭問屋 橘庄太郎
電略（タチ）

和歌山縣東牟婁郡古座町
製炭移出 松本彌右衛門
電略（マツ）又ハ（マ）

和歌山縣東牟婁郡高池町
米穀雜貨木炭 西房之助
電略（ニシ）

和歌山縣西牟婁郡日置村
木材木炭海運業 山下作次郎
電話十番、電略（ヤマ）

木炭問屋　紀伊周參見町
丸力組　瀧本勝三郎
山本藤之助

備長　紀伊周參見町
木炭問屋　森安松

浦木　木炭專用商標
和歌山縣東牟婁郡三津村
浦木本店
店主　浦木清十郎
井　三重縣南牟婁郡御船村
浦木支店
電話五番、電略（ウ）

和歌山縣西牟婁郡日置村
木炭問屋　伊藤瀧藏
電話十五番
電略（イト）

大阪市西區幸町通一丁目
合名會社　島炭店
電話櫻川　長八三三番
八三四番

島根縣

島根縣は最近に至りて木炭の改善と販路の擴張に努力し今や年額三千萬貫に垂んとする優勢を示し販路も從つて擴まり其白炭は主として關西地方就中神戸大阪へ仕向けられ、黑炭は大垣、岐阜、名古屋地方に止りしも關東市場へ供給せらるゝもの年と共に其量を增し、横濱市年消費量一千三百萬貫の半ばは島根縣産大部分を占め亞ぐに島取縣伯備線の産なり而して東京市場へは最近供給量を增し今日にては山陰木炭の前途に鑑み取扱はざるものは時代に遲るゝと稱し競ふて注文を發するの狀を呈し居れり、又近郊及び近縣へも販路擴大し東北産の販路を壓倒しつゝあり、而して全産額中黑炭六割を占め白炭四割にして白炭は多くは正味六貫の俵を標準となし、黑炭は稍雜共に正味五貫を標準とするも關東市場の嗜好は雜木の四貫を欲するを以て最近各地方とも雜木を正味四貫に改め何れも俵切角造として製出供給しつゝあり今部分的に出雲地方と雲南地方と石見地方とに分ち情勢の一端を紹介する所あるべし

出雲地方

黑炭の移出の嚆矢は出雲安來荒島の兩驛にして大正八年の交池田燒と稱せる平角造の丸通し物を製出し又簸上線木次驛を始め山陰製炭株式會社の全盛を極めし頃は相當數量の黑炭を平角俵丈二尺二寸内外の二醜き包裝にて製出せるも末炭化にして不評判を極め殘存せる工場用か縣外移出の程度に過ぎざりき斯くては賣先に於て不利を招くの結果、時には安來木炭輸出商同盟會の組織を見又は廣瀨町輸出同盟會の蹶起となり生産地を督勵し其各生産地に於ては部落的木炭改良小組合々組織し改良促進の結果は忽ちにして聲價を認むることゝなり其製品は藁俵にして越前式に倣ひ切角包裝として先づ北陸産の販路を壓倒する勢を以て關東市場を風靡するに至れり、而して最近にありては後輩の地石見が寧ろ出雲を凌駕するものあるに發奮し、安來、廣瀨兩地移出商結束して同盟會を固め檢査員を特置して移出木炭に對して檢査を行ふと共に、廣瀨町の奥部能義郡の主産地と提携し愈々改善を促がし包裝の如きも藁俵にあらざれば絶對に買ひ入れざる決議を以てなす等、早くも自覺せる産地布部村の如き村全體を包繞せる布部村木炭業組合の組織を見るが如き、又山佐村にありても既に部落的組合の組織を集めて村一體を統一して改善に努めらるゝものあり、黑炭正味五貫雜正味四貫にして選別をも吟味し石見に劣らざる製品を以てし愈々東京方面目ざして販路の伸張に努力する所あり前途の好望見るべきものあるべし

雲南地方

宍道驛より分岐せる簸上線の終點木次驛より移出さるゝ木炭は多くは飯石郡の產にして同地に燒間業組合の設置あり改善施設怠らざるものあれども同地方は容易に舊套を脫せざるものありて大割にして且つ末炭化部の存するを嫌はれ居りし爲め、視察團を組織して中央市場の情勢を究むること等あり爾來改良に腐心し今日にては著るしく面目を一新し來れるも未だに二流品として取扱はるゝものなきにあらず唯木次驛前の長谷川木炭部に於て特に吟味せるものゝみ聲價を認めらるゝに過ぎざるは同驛移出商諸氏の今後の刺擊となり飯石郡同業者の發奮と相和して將來に囑目せらるゝ地たるべし薪炭林の蓄積に於ては今後無盡藏たるの感あり尙ほ大東町驛へは大原郡產の集散あり、木次驛へも同郡の產集まる

石見地方

山陰木炭の供給移出地として、現在及び將來に囑目せらるゝものは石見地方なりとす、沿線悉く木炭の移出あるも就中濱田驛に集散さるゝもの次いては江津驛に集散さるゝものを量に於て品質に於て最良とし漸次美濃郡の資源林豐富なるに著眼し益田驛に店舗を有せるものゝ外大社の杉原周一郎氏を始め江津、濱田の移出商に依つて出張所を設けらるゝ等、島根縣產額の大半は石見の產と云ふも過言ならざるべし、而して大正十五年四月石見四郡を網羅し大規模なる木炭共進會の開催さるゝあり東京より大澤鉄治、小池新太郎、大竹群次郎の三氏を審査員に横濱よりは竹內定吉氏を審査員に囑託する等、右諸氏に依つて改良されゝ製品を紹介せる廉にも依るべしとするも移出商諸氏には代るがわる關東市場を視察して取引の手を延ばし製品は各消費地に紹介せられて俄かに聲價を發揚し來り現在に於ては既に東京を超へて千葉、茨城、埼玉の各地へ供給され格安品なりとして歡迎さるゝに至る

而して改善施設狀況としては那賀郡を先驅に同組長の長濱庭三郎氏の卒先提唱せるに始まり木炭の改良を促進すべき方便としては部落的小組合を組織し之を同業組合が引き纏ふて統一し鞭韃するを以て最も當を得べしとなし既に郡內に三十餘の組合組織ありと云ふ、一面郡同業組合は竈元指導技術員を特置して常に巡回指導に當らしむる等、石見木炭共進會の實現も長濱組長の提唱に依れりとあるほどにて同組長の熱心は忽ちにして那賀郡產木炭の改善を促進し、又之れと隣接せる江津町へ集散の產地邑智郡も略ほ同樣の施設を急ぎ改良怠りなきものあり、かくて石見木炭は樹種優良なる

若木多く包裝は東北岩手青森の兩縣下より購入する萱すご俵を以つてし、選別の如きも最近細丸と中丸とに別ち中丸は直徑八分以上又は一寸以上乃至二寸程度のものとし八分以下は細丸とし別に細丸を歡迎する消費地へ仕向け關東市場へは各々嗜好に適合すべく改良し供給さるゝものありて且つ製炭法は八名式に依り竈の小なるため燒歩は加算するも品質の優良を以て燒歩は取り返し得べしとし努めて此八名式が奬勵され山陰地方の模範地として先進地として權威を發揮し木炭の聲價は日々に其名を高め、關東市場よりの注文も亦日々に新たなるを加ふるの狀況なり

島根縣當局の施設

島根縣當局にありては薪炭林の啓發は林道の開鑿にありとし之れに力を注がるゝものある一面に於ては縣下に亘り規格を統一し隅々までも改良を遂げしめんことの見地より、未だ目覺に乏しき部落もあり同業組合の組織に至らざるもあれば急速統一的改良を圖らんには縣營に依つて木炭の檢査を行ふを以て可とすべしとなし、ものぐさなる當業者には產業自治の精神なきものに之を唱導して後手間ひま缺いて同業組合を組織し組織成つて而して之を縣聯合會に統一せんよりは寧ろ縣營に依るを最善とし之に共鳴するもの多きが如くなれば或は大正十六年度よりは縣營に依つて縣全體の製品が統一せらるゝかの運命に近づきつゝあり、何れにしても石見にしても又出雲にしても當業者の奮向上に依り木炭の改良を見ることは、大正九年の交に比し今日の製品が一變して面目を改めし以上に今後の改良必ずや速かなるものあるべし。

山陰輸出商同盟會

木炭移出業者として紹介すべきものは必ずしも山陰輸出木炭商同盟會員のみに止まらずと雖も最も主きをなす業者の團體なれば移出商を紹介せんと欲せば先づ同會の會員を紹介せば事足るべしと信じ別項に其各會員の店舗所在地と氏名とを掲ぐることゝせり。

濱田町桂宗五氏の公私に熱心

島根鳥取兩縣に跨り主なる移出商を以て網羅せる山陰輸出木炭商同盟會に會長として二期同任務の上にあり自己も又其移出取扱木炭の改良に努めつゝある石見濱田町桂宗五氏は夙きに長崎高等商業を出でゝより本店なる山口縣殿居に在り嚴父の經營せる木炭業に手傳い居れるうち斯業に趣味を有すると同時に一面業の上に經驗を重ぬると共に濱田町築港に居を構へ桂商店製炭部として活動を開始することゝなり、山口縣阿武郡萩及江崎、山口線三谷、吉敷郡篠目、大津郡菱海、豐浦郡西市の各地に製炭所を直營し又島根縣内にては那賀郡美又、邑智郡市山、川越の各地へ手を擴め、八名式製炭法に據ると共に普及に努め其後店舗を濱田驛前に移し石見木炭が改善さるゝを以て無上の

樂しみに益々業の上に力をつくしつゝあり、再選されて山陰輸出木炭商同盟會に會長とし、引續き率仕甲にあり、氏は齢未だ三十有四、少壯の身は常に輕裝、天資淡白にして、一見してはどこにも偉なる所は認め得られずと雖も、其取引の正確にして信用あると共に眞面目の製品を供給する所、而かも德望の厚きところより氏の人格を敬慕し斯界に此の人あるを山陰の權威なりと稱せらるゝに見て知る、曩きに島根縣山林會は氏に託するに東北地方の視察を以てし那賀郡木炭同業組合も亦同時に視察員として囑託し氏の歸來復命は、島根縣木炭界の前途に資するものゝ多かりしを信ず、一面氏は營業の規模を更に一層擴張し、美濃郡都茂村八名式木炭改良組合の如き其製品年額五萬俵は氏一手に託し、尙ほ那賀郡内數ヶ所の部落組合と特約を結び大量移出に努む

濱田町八日會の顏觸

島根縣那賀郡濱田驛よりの移出數量は、山陰線の首位を占む、此の町の移出商、桂宗五氏を始め石州木炭株式會社西村健八、齋藤榮三、小林粂一、後藤博市支店の諸氏には濱田町薪炭問屋八日會なるものを組織し毎月一回八日に會合して生産地と氣脈を通じ木炭の改良を促進すること並に移出販賣に當つては更に誠實を旨とし相互の信用向上に努むること、市場の相場を攪亂するが如き行爲を慎み市價平調を圖ること等を議事として緊議を重ねつゝあり、就中石州木炭株式會社の如き那賀郡組合副組長佐々田倫一氏を社長とし永見支配人の活動と共に山松印の商標は今や關東各地に謳歌せらるゝに至る、西村健八氏亦最近活動の歩を東京に延ぶ、石見濱田の將來見込多かるべし

江津町移出商の面々

江津驛移出木炭は一年四百萬貫を超へ邑智郡産を主とし郡内産と稱に廣島縣雙三郡産の集散地なり、大量移出商多く後藤博市氏の如きは各地に支店出張所を設け一ヶ月移出量多きときは百五十車にも及びしことありと木炭の外に薪をも取扱はる、又江津商業株式會社は社長武田常太郎氏の經營する所最近福原利昌氏と共に邑智郡木炭同業組合指定問屋とし常に倍せる數量を移出す、而して武田氏の如き江津木炭改善の先驅者と云ふも過言ならず、其選別に於ては山俵を解いて根本的に精撰し、白炭の如きは金篩を以てせる選炭機にかけ黑炭にありては特約組合と氣脈を通じ小割奬勵に努め大と稱する若木太丸は大きに過ぐる嫌あるを以て二ッ割又は四ッ割に改め大樹は勿論之を小割とし一俵六十四五本詰め込めるを以て標準となす、江津組合員亦之に倣ひ江津移出木炭の日々に面目を改むるものは武田氏の提唱力說大いに與つて力ありと謂ふべし、組長園部清之助氏亦最近關東へ手を擴めつゝあり、其他横田傳二郎、丸武商店、土屋支店、中田寅一、田中與一郎の諸店ありて何れも押しも押されもせね商連を恣にし江津商界を飾る

美濃郡益田町

美濃郡は匹見索道に依つて資源林を開發し大正九、十年の交は年移出額四五十萬貫内外と聞き居れるが今日にては年産額二百五十萬貫を數ふるの優勢を示すに至り林源豐富なる所よりまだ〳〵産額は無限增加の勢を以て進みつゝありて、其木炭製造標準も軌を石見那賀邑智等と同ふすべく統一に努めつゝあり、移出商としては此地土着の人よりも寧ろ他より入り込むものゝ手に依つて移出さるる數量多く、大社町の杉原周一郎氏の如き逸早く出張所を設くるあり、後藤博市氏の支店を設くる

あり、其他江津より又濱田町より同所の移出商手を延ばし活動するあり同地方に於ける編者の知れる移出商には益田町に齋藤幸次商店、都茂村丸茂に井廻茂三郎商店等の在ることを知る

鳥取縣

鳥取縣に於ける一ヶ年産額は實際數量は千二百萬貫を超えんとし大正十五年七月一日より愈々縣營に依り一齊檢査を行ふことゝなり黑炭四割白炭六割の歩合にして黑炭として聲價を博せるは日野郡にして米子驛より分岐せる伯備線の沿線なる根雨驛を以て最も主位とせり同地近藤林業部の如き廣茫六萬町歩の薪炭林を有し自ら之を經營するの勢を呈し居れり近藤林業部は黑炭よりも白炭多く正味六貫萱包裝にて一ヶ月一萬俵の産出を示し多く京阪神の市場へ仕向け黑炭は關東市場へ供給しつゝあり尙此地に加藤信次郎商店ありて多くは黑炭を製出す、日野郡の雜木林面積は十萬町歩を數へ鬱蒼せる薪炭林は前途の無盡藏を思はしむ、縣は木炭査定委員會を組織し官邊と當業より十數名の委員を擧げ委員は關東關西の兩消費地を視察し先づ木炭の規格を定め黑炭稍は正味五貫の切角とし雜木は四貫とし尙ほ萱俵を奬勵する方針にてあれば檢査實施と共に製品の面目を一新して關東市場に供給の氣勢を沿ふことゝなるべし

移出商　には江尾驛に佐々木平三商店、黑坂に恩田庇市商店並に柴田林産株式會社、生山に雲越商會、上石見に小野幾支店の諸店ありて近藤林業部の外は黑炭に主きを置けり

境港　は隱岐島産の水揚港にして廣島驛商店あり手廣く移出を營む

京都府

京都府に於ける薪炭の産地は主として船井郡木炭同業組合地區内の各部落と北桑田郡鶴ヶ岡村等より産出せらるゝものを良品とし、園部驛前の森利三郎商店の如き早くも關東移出を開始し現に船井郡上和知村並に北桑田郡大野村鶴ヶ岡村に手擴く製炭事業を營み岐阜縣下の黑炭産地より職工を傭ひ入れ黑炭丸物を多く製出しつゝありて又近時東京方面が萱角俵を好むのそれに應じ改良を進めつゝあるが氏は大正十五年二月其使役にかゝる從業者を率いて東京、川崎、大森、横濱の各地を視察して以來更に改良の歩を進め聲價の認めらるゝあり、尙和知驛には林田薪炭株式會社の活躍するあり、鶴ヶ岡村の原産地には仲田商店ありて白炭黑炭共に需用地の求めに應じつゝあり、和知物産株式會社も和知驛前に店基を構ふ同地方薪炭林の蓄積狀況としては將來とも現産額を維持し行くには左まで不足を感ずるが如きことなかるべしと云ふ

因みに山陰線全線に亘る移出商を案内する方便に、掲載廣告を參照せられたし